



2025 年度 シンポジウム報告書

主体的・探究的な学び、その可能性とリアル

—東大附属×自由の森学園の共同調査が映す実践のかたち—



日時

2026 年 2 月 7 日(土) 13:00~16:30



場所

東京大学赤門総合研究棟 A200
および Zoom でのハイブリッド開催

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター

シンポジウム

主体的・探究的な学び、その可能性とリアル

—東大附属×自由の森学園の共同調査が映す実践のかたち—

報告書

2026年2月7日

於 東京大学赤門総合研究棟 A200

および Zoom によるオンライン開催

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター

目次

シンポジウム「主体的・探究的な学び、その可能性とリアル
—東大附属×自由の森学園の共同調査が映す実践のかたち—

開会	本田 由紀 2
開会の挨拶	勝野 正章・小国 喜弘・菅間 正道 3

第Ⅰ部 探究的な学びを可視化する

「東大附属と自由の森学園が育む学び」	浅川 俊彦 6
「共同調査から読み解く学びの実態」	石黒 千晶・上野 雄己 16
指定討論「東大附属×自由の森学園の共同調査から見えてきたもの」	松下 佳代・對比地 覚・宇都宮 和音 27
共同調査を踏まえた対話：コメンテーターとの対話およびフロアからの質疑応答	コメンテーター：松下 佳代・對比地 覚・宇都宮 和音 コーディネーター：上野 雄己 34

第Ⅱ部 探究的な学びは今、どう生きているか

【座談会】卒業生と語る探究の時間	羽田野 湧太・村松 波・板垣 藍・國増 紗世 コーディネーター：本田 由紀 41
フロアを交えた質疑応答及び話題提供者からの回答	49
総括	山本 義春 53
閉会の挨拶	本田 由紀 57

シンポジウム「主体的・探究的な学び、その可能性とリアル

—東大附属×自由の森学園の共同調査が映す実践のかたち—

2026年2月7日（土）13:00～16:30

会場：東京大学赤門総合研究棟 A200（ハイブリッド開催）

開会

本田 由紀（CASEER センター長・東京大学教育学研究科教授）

皆さま、今日は小雪もちらつく中、また非常にお忙しい中、対面もしくはオンラインで私どもの公開シンポジウム「主体的・探究的な学び、その可能性とリアル」にご参加いただき、大変ありがとうございます。私は東京大学教育学研究科教授で、このシンポジウムを主催している学校教育高度化効果検証センター（CASEER）のセンター長を務める本田由紀と申します。今日のシンポジウム全体を通じて総合司会の役割を務めますので、どうぞよろしく願いいたします。

最初にこのシンポジウムの趣旨などについてごく簡単にお話しします。ご存じのように学習指導要領では、高校のカリキュラムにおいて「総合的な探究の時間」を実施することとなり、教育現場ではどんなふうに行うのかということで困惑が非常に広がっています。

それに対し東京大学附属中等教育学校（東附）では半世紀以上前から、学校独自の考え方に基づいて主体的・探究的・協働的な学び、そして市民的な学びを行ってきました。東附と私ども CASEER は約 10 年前から緊密なタッグを組み、生徒の様子に関して緻密に情報を蓄積するようなデータベースを構築したり、生徒の様子を毎年追いかけて状況を把握するパネル調査を実施したりして、東附の中で起こっていることについてデータを取って分析を重ねてきました。その分析結果が蓄積してきましたので、書籍刊行に向けて準備をしているところです。

ただし、いくらデータや分析結果がたまっても、それはあくまで東附内部のことに過ぎないため、他

の学校と比較したり、共同で研究したりしていく必要があるということは内部でいわれており、それをずっと模索してきました。

そこで、このたびご協力いただけることになったのが自由の森学園です。東附とは全く違うやり方ですが、同様に独自の考えに基づいて探究的な学習に取り組んでこられた学校との間で比較調査が初めて可能となり、その結果を皆さまにお知らせすることが今日の公開シンポジウムの主眼となります。ちなみに、東大と自由の森学園は 2017 年から教育研究連携協定を締結しており、それがこうした共同研究、比較研究に結実したことも付言しておきたいと思います。

具体的な分析結果については第 I 部でご報告し、第 II 部では分析結果に基づいて、それぞれの学校の卒業生の方々数名ずつにお越しいただいているので、データの分析結果を卒業生の立場から読み解いていただく企画を設けています。

本日は首尾よく終わるか少々ドキドキしています。長丁場になりますが、どうかお付き合いいただければと思います。

開会の挨拶

勝野 正章（東京大学教育学部長・教育学研究科研究科長）

皆さん、こんにちは。本日は当シンポジウムに對面ならびにオンラインで多数ご参加いただき、誠にありがとうございます。今回は昨年に引き続き東附と自由の森学園との共同調査の知見を基に、両校における探究的な学びを、在学時にとどまらず卒業後の学び・仕事・生活における意義・効果まで視野に入れて、ご参加の皆さんとの対話を通じてより深く理解することを目的としています。

昨年度は自由の森学園との共同調査開始後初めてのシンポジウムであり、両校における学びの共通性だけでなく相違にも光を当て、探究的な学びの多様性を探ることを趣旨としていました。さらにさかのぼると、本シンポジウムは東附の協働の学び、探究の学びの効果検証を目的として、2017年度から毎年開催してきました。一昨年までのシンポジウムでは、東附の特徴である学びの意義を明らかにする点では成果を収めてきたと思いますが、一方で東附だからできること、東附でしかできない学びという受け止め方をされていたことも事実です。その点は、昨年からは自由の森学園との共同調査が始まり、両校の学びを比較することができたことで、探究的な学びの多様性と創造性を明らかにし、かつそもそも主体的・探究的な学びとはどのようなものなのかという根本的な問いについて理解を深めることができたと考えています。本日はこれまでのシンポジウムの成果をさらに一歩前進させ、タイトルにあるように主体的・探究的な学びの可能性とリアルに迫っていきます。

もう一言だけ付言すると、学校教育高度化効果検証センター（CASSER）は今年度から、初等・中等教育における探究学習への支援プロジェクトを開始しました。これは探究学習を指導されている全国の先生方の困り事に寄り添い、助言・支援・研修を実施するとともに、探究学習に取り組んでいる児童・生徒を東大の教員や大学生が直接支援するものです。

東附における在校生・卒業生パネル調査は2016年度に始まり、自由の森学園との共同調査も昨年からは開始したわけですが、この活動では今日までに蓄積してきた知見をシンポジウムや研究論文という形で公表するだけでなく、全国で取り組まれている探究学習をより直接的に支援する形で研究成果を社会に還元し、学校現場での新しい学びの実践を共に作っていきます。皆さまには、このように活動を拡充しているCASSERへのご理解とご支援を引き続き賜りますよう、この場をお借りしてお願い申し上げます。

最後に、本シンポジウムにご参加の皆さまにとって実り多いものとなりますよう祈念して、私からの挨拶とさせていただきます。

開会の挨拶

小国 喜弘（東京大学教育学部附属中等教育学校校長・教育学研究科教授）

はじめまして。本日はシンポジウムにご参加いただき誠にありがとうございます。本来であれば会場に伺ってご挨拶すべきところでございますが、よんどころない事情によりオンラインでのご挨拶とさせていただきますことをご容赦ください。

本校は1948年に創設され、一貫して教育の実験研究を使命としてきました。当時、連合国軍総司令部（GHQ）によって全国的に附属学校の廃止論が唱えられる中で、本校はエリート養成を目的とするのではなく、教育実践を通じた研究を通じてその成果を日本全体の教育の進歩・発展のために役立てることを学校の構想として掲げ、GHQに認められて創設された経緯があります。

非常にユニークなデザインで創設された学校であり、例えば学習に困難を抱えた生徒を入学検査であえて選び出し、その子どもたちをお客さん扱いするのではなく、お客さんを主人にして育てるのだという使命で教育することで、お客さんのままでは成長しなかったような子どもたちが確かに成長し得るのだということを実践を通して明らかにしたり、特定の学力層に偏らない多様な生徒集団を受け入れることで、公教育に資する教育実践研究を可能にするために抽選入学をいち早く導入したりといったことを進めてきました。

こうした実験学校としての理念は、現在の本校が掲げる協働的探究や探究的市民の育成という教育目標の根底にも脈々と流れています。多様な生を生きる生徒たちが他者と関わりながら真理を探究していく営みの中に、私たちはより良い教育、より良い社会を実現する方途を模索してきました。それはまさに民主主義社会のための実験学校という創設以来の精神の継承に他なりません。

本日のシンポジウムを通して、自由の森学園との比較において本校の探究学習の特徴がより明らかに

なるとともに、探究学習をどう進めていけばよいのかという全国の先生方のお悩みに対し、有益な知見が開かれていくことを願い、ご挨拶に代えさせていただきます。

開会の挨拶

菅間 正道（自由の森学園高等学校校長）

まずお詫びからしなくてはいけないのですが、本校は今日、中学・高校とも2月入試の日となっています。私もここ数年行われているシンポジウムはずっとリアルで参加していたのですが、今日はそちらに伺えないことを申し訳なく思います。

私からは2点お話ししたいと思います。一つは、今日の報告もそうですけれども、自由の森と東大教育学部との連携の経過を改めて振り返ってみたいと思います。勝野さんからも触れていただきましたが、自由の森学園は2017年から東大教育学部と、何か面白いことを一緒にやっっていこうというパートナーシップを築いています。

そのきっかけは2016年、私が社会科の教員として公開教育研究会の場で政治教育のレポートをしたことでした。どの分科会も助言者を招いているので、政治教育・市民教育であれば小玉重夫さんしかないと思い、旧知の小玉さんに声をかけて助言者として来てもらいました。分科会が終わった後の懇親会の場で、お酒の力もあったのですがフランクにいろいろ雑談する中で、教育学部と自由の森でもっと面白いことを研究・探究できるのではないかという話になり、その話がとんとん拍子に進んで、当時の新井達也校長と当時の学部長の小玉さんとの間で翌年、教育連携が始まりました。

残念ながらこれから本格的に連携をと思っていた矢先にコロナ禍に見舞われたので、足踏みがあったのですが、コロナ禍明けに幾つかの選択授業に東大生に入ってもらったり、中学生の大がかりなイベントに東大生に来てもらったり、できるところから本当に実験的・試行的に連携が進んできています。この過程の中で一昨年、この後報告してもらおう上野さんと私が浅川さんを介して出会いました。すっかり意気投合して、何かいろいろできないかということで今日の調査報告となっています。昨年、自由の森40周年の取り組みの一つとして調査報告をぜひ行

ってみたいということを上野さんにご相談し、上野さんからもこういうことができるのではないかとという提案がって今日のシンポジウムに至っています。

もう一つは、昨年12月24日付の朝日新聞に「大正自由教育 まいた種は」という記事が載りました。中心としては、個性的な野村芳兵衛が率いる池袋児童の村小学校のことが取り上げられています。今日の後半に本田先生の進行で卒業生のトークセッションがあると思いますが、この新聞記事には、自由教育の成否は短期的に見られるものではなく、その一つとして卒業生の今のありようからもうかがえるのではないかと書かれています。この記事にも出てくる『大正自由教育が育てた力』という門脇厚司さんの本もそうですが、多くの卒業生たち、しかもかなり高齢の方々の記憶や記録が残っています。今日の後半のシンポジウムも、自由教育の系譜につながる実践がどのように生徒の中に息づいているのか、どんな形で関連があるのかということを探究する大事な取り組みだと思っています。つまり、ピープルツリーならぬスクールツリーです。自由の森も、成城小学校や明星学園、玉川学園、和光学園といったさまざまな学校の歴史の中にあり、先輩たちが試行錯誤してきた歴史を引き受けながら今にそれを響かせ、将来良い形で継承していくという川の流れの中にあると思っています。

東大教育学部でいえば、堀尾輝久さんが「未完のプロジェクト」という言葉を残しています。教育という営みには完成はなく、いつも未完だと思います。今日のシンポジウムが出会いと対話の場となり、また次に何かつながるような日になると確信しています。

今日はなるべくパソコンの前に座りたいと思うのですが、冒頭申し上げたとおり入試の日なので、部分参加になったり、場合によっては判定会議のときにパソコンを閉じなくてはいけないこともあると思いますが、できる限り皆さんと一緒に学び合いたいと思っています。どうぞよろしく申し上げます。

第 I 部 探究的な学びを可視化する

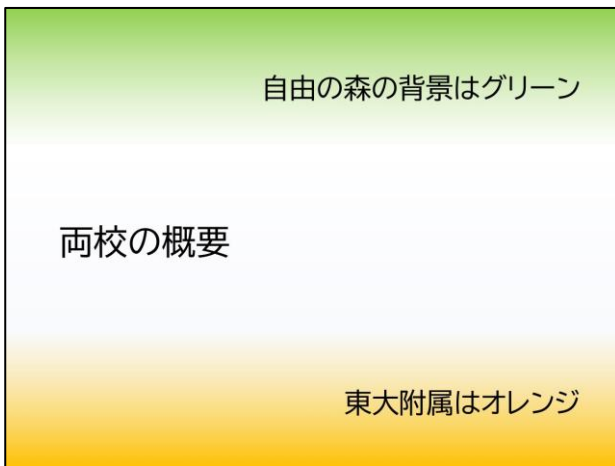
「東大附属と自由の森学園が育む学び」

浅川 俊彦 (CASEER 特任講師)



1. 両校の概要

私は自由の森学園（自森）に 12 年、東京大学附属学校（東附）に 20 年間勤務し、現在は息子 2 人が自森でお世話になっています。今日は両校の話が交互に出てくるので、自森の話は緑色の背景、東附の話はオレンジ色の背景になっています (Slide 1)。



Slide 1

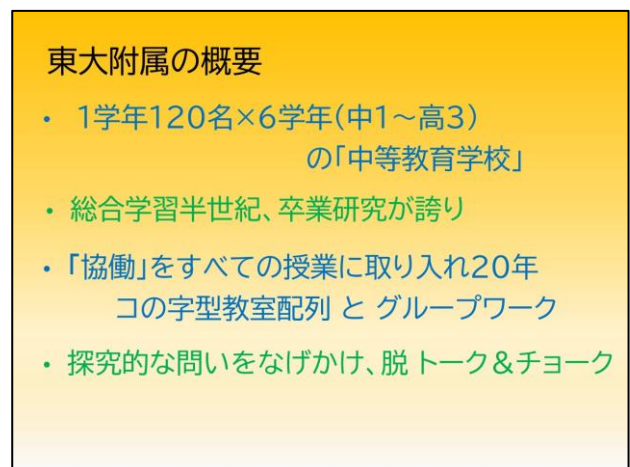
1-1. 東附の概要

東附は、「未来をひらく自己の確立」を教育目標に、ここ 10 年ほどは探究的な学び、協働的な学びを通して豊かな市民性を育むことを掲げています (Slide 2)。



Slide 2

1 学年 120 名、6 年間ほとんどメンバーが変わらず、卒業まで進む仕組みです (Slide 3)。総合学習は半世紀以上、卒業研究も 40 年以上の実績があります (Slide 4)。2005 年から「協働」を全ての授業に取り入れ、コの字型の教室配列とグループワークを全教科、総合学習も含めて毎時必ず行っています。



Slide 3

「総合的な学習の時間」が指導要領に位置づくはるか以前の1966年、「特別学習」としてそうした探究的な授業を開始しました。1983年には高2から高3にかけて1年半取り組む「卒業研究」を導入して、6か年一貫の総合的な学習のカリキュラムづくりが本格始動するなど、分厚い積み重ねがあります。

一方で教科学習は個々の教員の実践に任せられ、教科によっては先進的な成果を挙げるところもありましたが、正直なところ研究校としてはお寒い状況だった教科もあります。しかし2005年に「協働」を全ての授業に取り入れ、教科学習、総合学習にかかわらず、全ての時間でグループワークを実践しはじめたことが転換点になりました。

Slide 4

学びの作法として築き上げた協働が、授業システムの大きな特徴だと思います（Slide 5）。コの字型の机の配列で、お互いの顔が見えるように学び合います。脱チョーク&トークが特徴で、教員が黒板を背負って一方的にしゃべったり板書したりするようなことはしていません。

普通教室はコの字型の教室配列がデフォルトになっていて、お互いの顔が見える形で話し合うことが中心になります。

黒板の方を向いて教師の説明を延々と聞いたり、ずっと板書を写して1時間過ごしたりすることがないようになっています。

この形から4人組のグループワークに移行し、またこの形に戻るという往還を原則的にひとつの時間の中で必ず取り入れるようにしています。

Slide 5

お互いの顔が見える関係から、さらに「4人組になって」と言うと、右下の写真のような形でグループワークを行ったり、そこで話し合われた内容を教室全体で共有したり、こうした往復を一つの時間の中で何度も組み込んでいます（Slide 6）。



コの字型教室配列

グループワーク

Slide 6

ICTはどうしてもモニターとキーボードを前に閉じた学びになりがちですが、われわれはICTを協働のツールとして活用しようと考えていて、その典型が空間ユーザーインターフェースというシステムです（Slide 7）。



ICTも「個別最適化」でなく、協働のツールとして活用

Slide 7

机がタブレットのような機能を持っていて、それをみんなでのぞき込んだり、指を指し合ったりしています。Slide 8は体育のフラッグフットボールの試合を振り返っているところですが、一番うまくいった作戦をタブレットから呼び出し、戦術を書き込んで対戦したチームに送ると、そのチームが「こういう戦術でやられたので、ここにディフェンダーを置けば防げたのではないか」などと書き込んで、送ってきた班に返したり、そうしたやりとりも行われています。



からだまるごとで関わり合い
インタラクティブに世界とつながる

Slide 8

1-2. 自森の概要

自森は1985年に創立しました (Slide 9)。「人間の自立と自由への意志を育む」を教育理念としており、深い知性、高い表現、等身大の体験を通して、人間観・自然観・社会観といった「観」を育む教育を目指しています。

自由の森学園中学校・高等学校



1985年創立

人間の自立と自由
への意志を育む

深い知性
高い表現
等身大の体験
「観」の教育

Slide 9

中学校は30名×3クラス、高校は4クラス増えて30名×7クラスです (Slide 10)。開校時から、競争原理を超えるために、「思考、対話を通して深く学ぶ授業への転換」「点数ではなく、ことばによる相互評価への転換」「作品や表現を通して学びを確かめることへの転換」という三つの実践的転換を掲げています。

自由の森学園の概要

- ・ 1学年 約30名×3クラス(中学)
約30名×7クラス(高校)
の中高一貫校
- 競争原理をこえるために3つの実践的転換を掲げ開校
- ・思考、対話を通して深く学ぶ授業への転換
- ・点数ではなく、ことばによる相互評価への転換
- ・作品や表現を通して学びを確かめることへの転換

Slide 10

例えば探究的な問いとして、生物の授業では「熱帯雨林の航空写真に直線的に黒い影が走っている。これは一体何だろう」というところから学びがスタートします (Slide 11)。プランテーション農業のための道路なのですが、それがこの地域の動植物にどんな影響を与えているのかというふうに学びが始まっていきます。数学では「ハノイの塔」を使って等比数列を考え、ドラえもののひみつ道具「バイバイン」を使って指数関数を学びます。社会科では、産業革命で貧富の差が生じたといわれるけれども、現在の貧富の差と同じなのかどうか、そうした問いをみんなでも話し合っていきます。

- ・思考、対話を通して深く学ぶ授業への転換

探究的な問い40年分の蓄積

生物:熱帯雨林の航空写真に直線的に走る陰、それが何かを考えその影響を探る

数学:「ハノイの塔」をつかって等比数列を考える、ドラえものの「バイバイン」で、のび太が増殖させた栗まんじゅうは1日後にどうなるか?考える

社会:産業革命で生じた貧富の格差と、現代の貧富格差は同じなのか、異なるのか?

Slide 11

東附には4人組のシステムがありましたが、自森は徹底して話し合うクラスづくりが授業や行事を通して強く意識されています (Slide 12)。中には、生活綴り方的学習方法として子どもたちが書いた作文を

クラスみんなで共有し、そのことから自分たちが抱えている問題を考えていくような試みをしている学年もあるそうです。みんなそれぞれの考えでいいのではないかというところからどう脱却していくか、あるいは東附と違って、黙って考えるタイプの子の声がなかなか授業の展開に反映しないこともあって、そこからどのように抜け出していくかということが課題だと伺っています。

・思考、対話を通して深く学ぶ授業への転換

「学び合い」については…

徹底して話し合う「クラスづくり」が授業・行事を通して強く意識されている

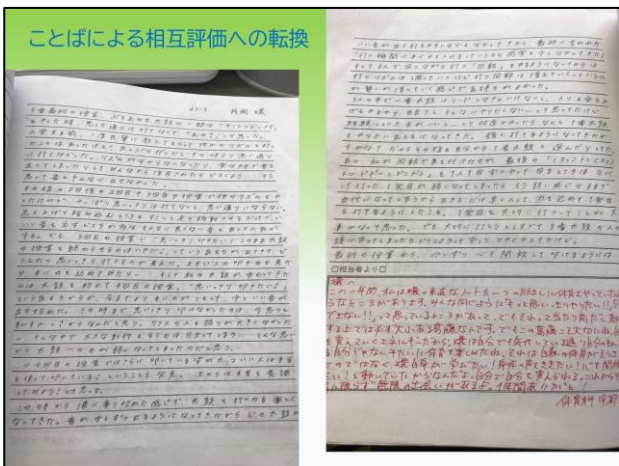
「生活綴り方的学習方法」を通して、互いを知り、みんなをつなげる試みも

「それぞれの考えでいいじゃん」という価値の相対化からの脱却が課題

Slide 12

ことばによる相互評価への転換も図っています。Slide 13は通知表代わりの学習の記録です。このようにぎっしりと生徒が振り返っていて、それに対して教員も言葉で返しています。

ことばによる相互評価への転換



Slide 13

毎学期ごとに、非常に分厚いものが返ってきます (Slide 14)。

評価について

「評価の役割」をしっかりと捉え、評価の質を高めようとする必要があります。

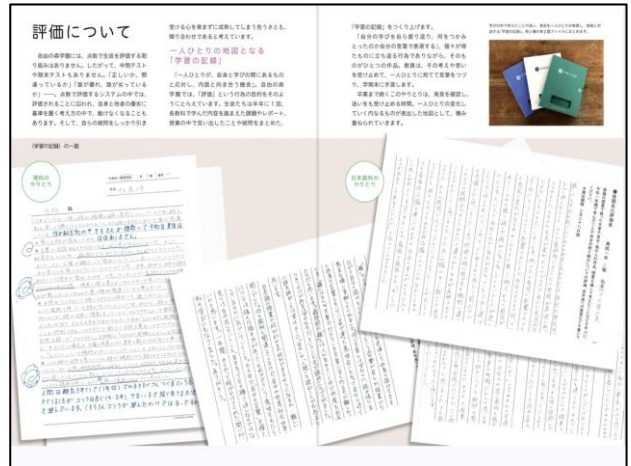
一人ひとりの成長と学びの記録として、評価の役割を捉え、評価の質を高めようとする必要があります。

「学習の記録」

一人ひとりが、授業や学習の過程を自分の成長の記録として、評価の役割を捉え、評価の質を高めようとする必要があります。

「学習の記録」

一人ひとりが、授業や学習の過程を自分の成長の記録として、評価の役割を捉え、評価の質を高めようとする必要があります。



Slide 14

子どもたちは、学習の記録はもちろん、作品や表現によって自分が学んだことを外に対象化していくことを非常に大事にしています (Slide 15)。

テストではなく、作品や表現によって学びの成果を確かめる



Slide 15

定期考査はなく、そういう意味では学習発表会がとても大事にされています (Slide 16)。

定期考査はなく、学習発表会が大切にされている



Slide 16

もう一つ大きな特徴として、表現・芸術による教育があります (Slide 17)。この作品を見ていただだけでもレベルの高さが分かると思いますが、作品づくりを通して、徹底して自分と向き合う時間になっています。



Slide 17

Slide 18 は、鏡と1年間にらめっこしながら、目の作品だけを仕上げていくという取り組みです。



Slide 18

4月に始まった染織の授業では、羊毛の脂を抜くところから始まり、染めて、ほぐしていきます。Slide 19は11月の写真ですが、スピンドルで糸をより始めていた生徒はクラスにまだ2人しかいませんでした。「いつ完成するのか」と聞いたら、「縦糸だけは何か今年度中に」と笑っていました。



Slide 19

そうした取り組みの中で作品が出来上がっていきます (Slide 20)。もちろん作品と向き合っているのですが、そのことを通して自分との対話をずっと続けるわけです。



Slide 20

木工も、丸太を切り出すところから始まります (Slide 21)。これは私の下の息子の学習の記録ですが、「小中学校の木を使って物を作る授業では、ただただ効率を求めて作っていて、作品のバランスや構造なんか全く気にせず作っていたけど、この学校の木工では丸太の状態の木を切るところから始めて、切った木の中からどれだったら作品を作りやすいかなと考えることができた。その先にどういう作品を作るか、作品のバランスはどうするか、どのような深さで木を削っていくかを自然に考えられた。初めから形が整えられている木に頼ってきたけれど、一から作品を作ることによって自分で考える力を高め

られ、そして達成感を実感できた」と書いています。それに対して、先生からも作品の写真とともに丁寧なコメントが添えられています。



Slide 21

表現の教育にはもう一つ、他者と響き合い心身を開放するという働きがあります (Slide 22)。



Slide 22

音楽の授業でも、子どもたちの本来の声を引き出し、それが響き合うことが大切にされています (Slide 23、24)。

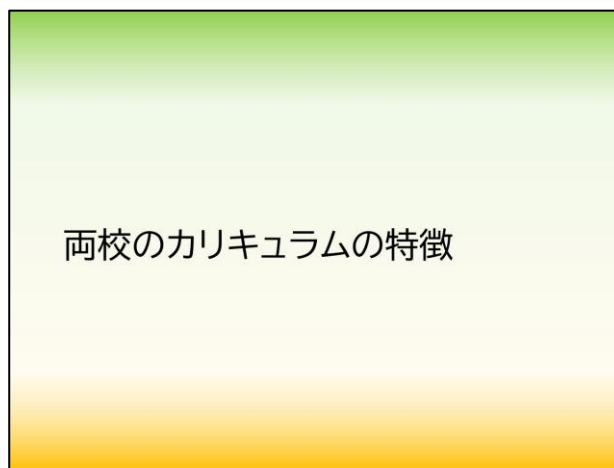


Slide 23



Slide 24

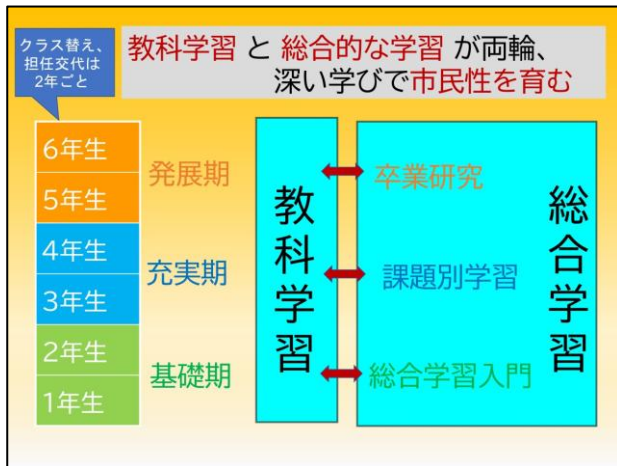
2. 両校のカリキュラムの特徴



2-1. 東附の特徴

東附は教科学習と総合学習の2本柱であり、教員も生徒もそのことをはっきりと意識しながら学んで

います (Slide 25)。2-2-2 制とって 2 年ごとにクラス替えがあるのですが、基礎期には総合学習入門、充実期には課題別学習、発展期には卒業研究に取り組みます (Slide 26)。



Slide 25

完全な中高一貫なので、6年間を見通したカリキュラムになっています。2年ごとに担任替えとクラス替えがあります。

教科学習と総合学習を車の両輪のように考えていて、1～2年生は総合学習入門に取り組みます。3～4年生は課題別学習、5～6年生は卒業研究に取り組みます。

Slide 26

自らの課題を設定し、文献調査を行い、広い意味でのフィールドワーク、まとめ、プレゼンという手順を学年それぞれの発達段階において何度も繰り返します (Slide 27、28)。行事なども含めた学校生活全体が主体的・探究的・協働的な学びに編み込まれているようなイメージです。

総合的な学習での探究

1人或いはグループで、みずからの課題を設定し、文献調査
フィールドワーク まとめ 発表 の手順を何度も踏む。

遠足から宿泊行事もすべて「主体的・探究的・協働的な学び」の布石に

1年生 : 東大探検・国際理解・情報とメディア

2年生 : 半径2km研究・身体表現(演劇・舞踊・和太鼓・狂言)

3,4年生 : 各教員が店開きした14前後の「課題別学習」講座から選択

5,6年生 : 1年半かけた卒業研究(最低16,000字)

Slide 27

6年間のあらゆる機会を通して自分で課題を設定します。問いを自分で立てることがすごく大事なのではないかと考えています。

課題を設定したら、まずは文献調査を行います。その領域で何が課題になっているのか、どこまで明らかになっているのかを知らないで独りよがりな思考になってしまうからです。

次に、文献調査を踏まえて広い意味でのフィールドワーク(たとえば実験やインタビューやアンケートなど)を行い、考察して結果をまとめてプレゼンを行います。

この「課題設定」「文献調査」「フィールドワーク」「まとめ」「プレゼン」の流れを各学年のレベルで何度も繰り返し、少しずつ鍛えていきます。

Slide 28

1年生の総合学習入門では「東大探検」を行い、まずは歩いてみて、そこからテーマを探します (Slide 29)。「情報とメディア」では、メディアリテラシーとリファレンスの初歩を学び、そして「国際理解」も含めて二十数時間ずつ取り組む形になっています。

1年生総合学習入門

東大探検 :

本郷・駒場キャンパスでのフィールドワークをおこなう

情報とメディア :

メディア・リテラシー と リファレンスの初歩を学ぶ


国際理解 :

「他者理解」から、「国際理解」「自己理解」へ

Slide 29

2年生の総合学習入門では、「身体表現」の授業で協働の学びをより深く実現するための「関われるからだ」を耕し、2年生で既に半年間、個人探究を行います（Slide 30）。

2年生総合学習入門



身体表現：和太鼓・演劇・舞踊・狂言
 「協働」の学びをより深く実現するため「関われるからだ」を耕す
 半径2km研究：
 学校周辺をフィールドとして半年間個人研究をおこなう

Slide 30

3・4年の課題別学習では、異学年で学びながら、教員が「この指とまれ」方式で開設した講座を自ら掘っていき、そこに生徒を巻き込んでいくような学びを行っています（Slide 31）。

課題別学習3・4年

- ・4分野
「自然・環境」「人間・社会」「科学・産業」「創作・表現」
- ・年度により 12～15開設した講座から、ひとつ選ぶ
- ・校外での探究活動、宿泊を伴うフィールドワークを行う講座も




Slide 31

卒業研究ではちょうど今、4年生がテーマ決めて、朝・昼・放課後と教員のところを回っている時期です（Slide 32）。5年になると月1回ゼミを行います、当然その間は自分で調査・研究を積み重ねていき、6年の7月に論文を提出、9月に発表会という形で探究学習がプログラムされています。

卒業研究

個人研究 16,000字以上
 生徒3人に教員1人のゼミ形式

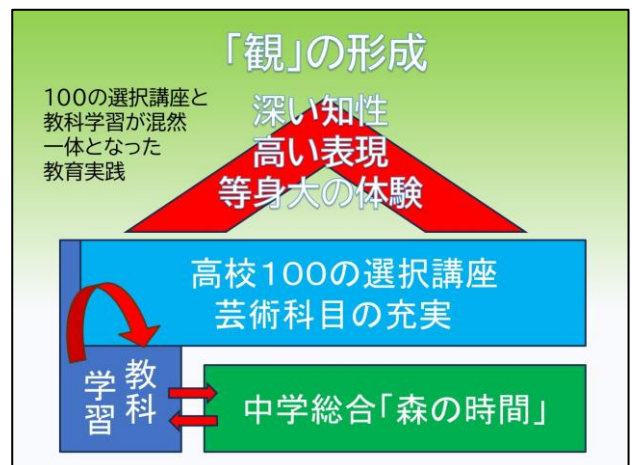
- ・4年 テーマ決め
- ・5年 月1回の授業
調査・研究
- ・6年（7月）論文提出
（9月）発表会



Slide 32

2-2. 自森の特徴

自森では、中学校こそ「森の時間」と教科学習に分かれているのですが、高校に上がると教科学習と総合の区別がありません（Slide 33）。



Slide 33

ざっと Slide 34 のような形で選べるようになってはいるのですが、この他に美術は選択必修で4単位、音楽は6単位、体育では表現活動に取り組んだり非常に多様です。この中から自分はどうに授業を選んでいくかということ自体が探究になっていて、進路にもつながっているような学びです。

「協働」のシステム、
6カ年総合カリキュラムの
東大附属

問いの質、豊富な選択肢の
自由の森

Slide 39

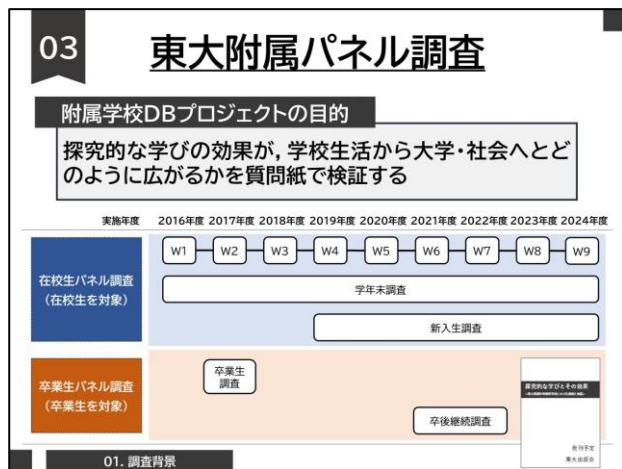
学びの作法
コース料理
東大附属

問いの質
アラカルト料理
自由の森

Slide 40

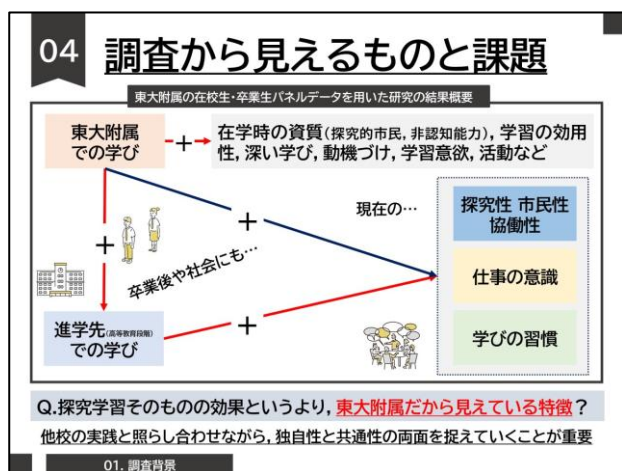
両校ともに、授業・行事・課外活動といっ
た学校生活のあらゆるものを大切にしな
がら、自立した市民を育もうとしている

これらの成果は現在書籍として取りまとめており、東大出版会より発行される予定です。



Slide 3

そうした調査を通して、東大附属の生徒たちの特徴や探究的な学びの効果がさまざまに明らかになってきました (Slide 4)。それは在校時にとどまらず、進学先での学びや社会生活、さらには現在の在り方とも関係していることが見えてきています。

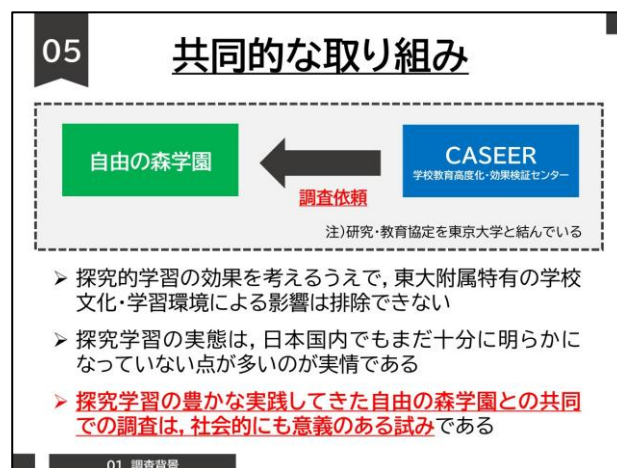


Slide 4

一方で、シンポジウムや学術的な報告を行う中で、それは東大附属だからこそ見えている効果であり、他の学校で同じようには見られないのではないかといったご意見を頂くこともあります。確かに探究的な学びにはさまざまなアプローチがあり、その方法や表れ方、効果も一様ではありません。だからこそ、東大附属の探究的な学びをより深く理解するためにも、また探究的な学びの全般的な効果を捉えていくためにも、今後はさまざまな学校と共同で取り組む

必要があると考えています。

そうした中で、新たなプロジェクトがスタートしました (Slide 5)。本日はご紹介する、自由の森学園との共同調査です。実は本学の教育学部と自由の森学園は教育・研究協定を結んでいます。先ほどご登壇いただいた浅川先生をはじめさまざまな先生方とのご縁もあり、CASEER から自由の森学園にお声掛けしたことがこの取り組みのきっかけとなりました。現在のプロジェクトや探究学習を巡る課題も踏まえ、探究学習の豊かな実践を積み重ねてこられた自由の森学園と共同で取り組むことは、社会的にも意義のある試みであると考えられます。



Slide 5

浅川先生がご報告くださったように、それぞれの学校に独自のカリキュラム構成があり、同じ探究学習といってもその方法は多様です (Slide 6)。取り組み方や意識、先生方の関わりによって、生徒への影響も変わってくると思います。

06 東大附属×自由の森学園

探究的な学びに長年取り組んできた
自由の森学園と連携を開始(2023年度～)

多様な探究学習の実践と効果の検証

01. 調査背景 「澁川・宇都宮(2025). 2025年度CASEER主催シンポジウム報告書」より引用

Slide 6

そこで本共同調査では、各学校における探究的な学びの実態を理解し、その多様性を捉えることを目的としました (Slide 7)。共同調査の歩みとしてまず2023年度には、調査実施の承諾を得るために、自由の森学園の職員会議や研究部などをご報告の機会を頂きました。2024年度からはCASEER、東大附属、自由の森学園の3者でタスクフォースメンバーを設置し、具体的な検討を進めてきました。また予備調査を実施し、自由の森学園の公開研究会でその内容をご報告しました。2025年2月のCASEERシンポジウムでは、両校の教育実践についてご紹介する機会も頂きました。2024年度末に本調査を実施し、本日その結果をご報告する運びとなっています。改めて、本調査にご協力いただいた両校の先生方、生徒の皆さん、保護者の皆さまに心より感謝申し上げます。

07 共同調査の目的

共同調査では、**探究的な学びの実態を明らかにし、その多様性と効果、教育的意義を捉える**ことを目的とする

【共同調査に関わるこれまでの歩み】

2024年4月 CASEER・東大附属・自由の森学園による共同調査TF(タスクフォース)を設置

2025年2月 2025年度CASEER主催シンポジウムにて両校の教育実践を報告

2025年2月～3月 両校の教育実践(特に探究学習)を多角的に捉える共同調査を2024年度末に実施

01. 調査背景 「澁川・宇都宮(2025). 2025年度CASEER主催シンポジウム報告書」より引用

Slide 7

2. 調査方法

昨年度末に実施した本調査では、自由の森学園にとって初めての調査だったこともあり、全学年を対象とすることが難しい状況でした。そのため、タスクフォースメンバーおよび関係の先生方が担当されている学年である中学1年生と高校1年生を対象に調査を実施しました。これに伴い、本報告で使用する東大附属のデータも中1と高1のものに限定しています。そのため、本報告は各学校の限定的なデータに基づくものであることをあらかじめご理解いただけると幸いです。特に学年によって受けている影響はさまざまであり、例えば学年ごとの授業内容や生活だけでなく、社会的な情勢の影響も受けているため、本報告では学年ごとに分けて検討しています。

08 方法

○調査時期 2025年2月～3月 自由の森学園の調査対象に合わせ、**中学1年生と高校1年生**を分析対象

○分析対象者 自由の森学園は調査経験がなく、全校実施は負担が大きいため特定学年のみ実施

東大附属	2024年度在校生パネル調査参加者 中学1年生116名、高校1年生110名
自由の森学園	2024年度調査参加者 中学1年生67名、高校1年生144名

注)調査は本学倫理審査専門委員会の承認を得たうえで実施

○調査項目 (東大附属パネル調査と既存尺度で構成) 調査には同一項目使用

学習活動, 学習の効果, 探究性・市民性・協働性, 学習アプローチ, 生涯学習意欲, 動機づけ, 性格特性, 自尊感情 など

東大附属は「総合学習」と「教科学習」 自由の森学園は授業全般 (授業が「総合学習・教科学習」に区分されない)

02. 調査方法 「澁川・宇都宮(2025). 2025年度CASEER主催シンポジウム報告書」より引用

Slide 8

具体的な対象者数は、東大附属は中1が116名、高1が110名、自由の森学園は中1が67名、高1が144名となります。

調査項目に関しては、両校の特徴、共通性、独自性を比較理解するために、同一の項目を用いる必要がありました。そこで、これまで実施してきた東大附属パネル調査の項目を援用することとなりました。実際の調査では多面的な項目を扱っていますが、本日は時間の関係もあり、学習活動、学習の効果、探究性・市民性・協働性、学習アプローチに関する変数に絞ってご報告します。

具体的な調査項目は、Slide 9のとおりです。東大附属では総合学習と教科学習を分け、それぞれの活

動内容について尋ねています。具体的には①～⑥が総合学習に関する項目、⑦～⑩が教科学習に関する項目です。例えば「先生に教わったり、本や新聞、インターネットなどから情報を得たりして基礎的な知識や技能を身に付ける」「追加で得る必要が出てきた情報について、専門家やそのことをよく知っている人に質問やインタビューする」などです。このようにさまざまな学習活動の内容を具体的に設定して質問しています。一方、自由の森学園では同様に分けて尋ねることが難しかったため、これらの項目については授業全般という教示文で尋ねています。

09

学習活動

学習活動を測定する10項目

① 先生に教わったり、本や新聞、インターネットなどから情報を得たりして基礎的な知識や技能を身に付ける (基礎知識の習得)
② 追加で得る必要が出てきた情報について、専門家やそのことをよく知っている人に質問やインタビューする (専門的情報収集)
③ 実習、実験・観察、製作、調査、体験活動などを行う (体験的学習)
④ 友達や専門家ではない人に意見を聞いたり、質問したりする (広範な意見交換)
⑤ 友達や先生に自分の考えや意見をわかりやすく発表する (自己表現と共有)
⑥ 自分の疑問や問題意識を明確な形にし、具体的な課題として設定する (問題意識の明確化)
⑦ 先生の話や意見を聞き、教科書・資料集などを讀んだりして基礎・基本を身に付ける (基礎学習の習得)
⑧ ドリル(反復練習)や先生が用意した課題に取り組んで知識や技能を定着させる (反復学習の実践)
⑨ 先生や友達と議論や意見交換をして理解や考えを深める (協働による理解深化)
⑩ 本やインターネットなどで補助的な情報や発展的な内容を追加で調べる (情報収集・探索)

注)東大附属パネル調査で使用されている10項目、6件法 (1:全くしなかった - 6:とてもよくやった)

東大附属では総合学習(①～⑥)と教科学習(⑦～⑩)、自由の森学園では授業全般

02. 調査方法

Slide 9

Slide 10 は、学習活動と結び付くと想定される探究性・市民性・協働性に関する調査項目です。例えば、探究性は「自分が知りたいことを見つけようとする」「自分が知りたいことについてさらに調べたり考えたりする」など、市民性は「自分には関係が無さそうに見えることでも自分自身のこととして考えようとする」「自分について振り返り、社会の中で自分が出来ることを考えてみる」など、協働性は「他の人の考えや意見をよく聴く」「他の人に自分の意見や考えを、分かりやすく伝えようとする」などです。

10

探究性・市民性・協働性

探究性・市民性・協働性を測定する12項目

探究性	自分が知りたいことを見つけようとする
	自分が知りたいことについてさらに調べたり考えたりする
	新しいことを発見したり、考えたりすることはおもしろい
	分からないことがあっても、何とかして解決しようとする
市民性	自分には関係が無さそうに見えることでも自分自身のこととして考えようとする
	自分について振り返り、社会の中で自分が出来ることを考えてみる
	世の中であたり前と思われる色々な物事を、本当にそうなのか自分自身で考えようとする
	社会の中の様々な事柄について、自分なりに考えたり意見をもったりする
協働性	他の人の考えや意見をよく聴く
	他の人に自分の意見や考えを、分かりやすく伝えようとする
	他の人の考えや意見の違いを受け入れ、話し合う
	他の人の意見や考えを、自分自身の考えや意見に活かす

注)東大附属パネル調査で使用されている12項目、5件法 (1:まったくあてはまらない - 5:とてもあてはまる)

02. 調査方法

02. 調査方法

Slide 10

この東大附属パネル調査の実施委員会は約 20 名の研究者・教員によって構成され、調査項目はその中で東大附属の教育目標に基づいて作成されたものですが、汎用性の高い内容になっています。実際に自由の森学園での予備調査を通して使用可能性を検討し、公開研究会では生徒・先生・卒業生・保護者の皆さまと共にこの指標に関して議論してきました。

こうした調査項目を用いて分析を行い、具体的には学習活動と探究性・市民性・協働性との関連を見ていきたいと考えています (Slide 11)。その中で本発表では、一つ目に生徒は学習の効果をどのように感じているのか、二つ目に生徒の学習活動の状況や探究性・市民性・協働性の在り方はどのようなものなのか、三つ目に学習活動と探究性・市民性・協働性との関係はどのように見られるのかという三つの視点から分析しました。

11

分析内容

本発表では、両校の学習活動と生徒たちの探究性、市民性、協働性の関連を検討する

1. 生徒は学習の効果をどう感じている？
2. 生徒の学習活動の状況や探究性・市民性・協働性のかたちは？
3. 学習活動と探究性・市民性・協働性との関係は？

注)分析にはJASPO.95.3.0を使用した

留意点:分析の目的は学校間の優劣を比べるのではなく、各学校の学びの特徴を構造として捉えることとする。加えて、探究的な学びの実践の多様性を考えるための一つの視点を示すものであり、特定の結論や方針を定めることを目的とするものではない。

02. 調査方法

Slide 11

一方で、このように共同調査の報告・分析を行うと、数値が一人歩きしてしまいます。数値が示されることで学校間の優劣を付けて見られてしまうからです。しかしながら本調査は、あくまでも学校間の学びの多様性を捉えるための一つの視点であり、特定の結論や方針を導き出すことを目的としていません。そのため、本分析では数値自体を強調するのではなく、学校間の構造や特徴を理解するための視点として示していきます。

そこで、学校間の探究的な学びの構造を理解するために、本分析では心理ネットワークアプローチというネットワーク分析を用いました (Slide 12)。簡単に言えば、心理現象を多くの変数が相互に影響し合うネットワーク構造として捉え、その構造をデータから推定・可視化することで現象をより詳しく理解しようとする方法です。特に学習活動と探究性・市民性・協働性との関係は、一つ一つの相関で捉えられるものではなく、複雑に絡み合っていると考えられます。そのため、本分析はそれらの関係性を捉える上で有効な手段の一つとなると考えました。

12 ネットワークから捉える

一つひとつの関連(相関)を見るだけで、学習活動と探究性・市民性・協働性の理解につながるのか？

→ さまざまな活動や心理的な要因が複雑に絡み合っている

【心理ネットワークアプローチ】

心理現象を多くの変数が複雑に相互作用し合うネットワーク構造として捉え、その構造をデータから推定・可視化することで、現象をより詳しく理解しようとする方法
(佐藤・伊藤, 2022; Borsboom, 2008)

- ノード(円): 探究性・市民性・協働性, 各学習活動の変数
- エッジ(線): 偏相関係数を表し、太いほど関連が強い
- 青色の線: 偏相関が正の関係を示す
- 赤色の線: 偏相関が負の関係を示す

横断調査による同時性ネットワーク図

02. 調査方法

Slide 12

このネットワークは、ノードと呼ばれる円とエッジと呼ばれる線で構成されています。青色は正の関係、赤色は負の関係を示しています。なお本分析は、他の変数の影響を統制した上での2変数間の相関である変相関係数の情報を基に描いています。エッジと線の太さは関連の強さを視覚的に示していますが、統計的有意性や因果関係を意味するものではありません。

せん。またエッジの推定値は、サンプルサイズ、測定内容、モデルの影響を受ける可能性があります。本報告では各学校の探究的な学びの形を直感的に理解するために用いていますが、解釈には十分な留意が必要です。

3. 調査結果

まず、学習活動の効果について六つの側面から尋ねています (Slide 13)。東大附属では総合学習の効果を、自由の森学園では授業全般の効果を尋ねています。中1と高1で違いが見られるものの、「特に効果がある」「効果がある」と回答した割合の平均が最も高かった項目は、両校共通して「与えられた情報や自ら得た知識から自分なりに考え、判断する力を培うこと」「複数の角度から物事に迫り、問題解決に活かす力を培うこと」の2項目でした。さらに他の項目でも6割以上の生徒が「効果がある」と認識しており、各校での授業が生徒に一定の効果として受け止められていることがうかがえました。

13 学習活動の効果認知

- ① 与えられた情報や自ら得た知識から自分なりに考え、判断する力を培うこと
- ② 複数の角度から物事に迫り、問題解決に活かす力を培うこと
- ③ 他の人の考えを聞き、自分の考えを見直すという態度を培うこと
- ④ 他の人と協力して、課題に答えを出そうとする態度を培うこと
- ⑤ 自分で新しい課題やその解決方法を探し、自分の意思で学ぶ態度を培うこと
- ⑥ わかったことを整理・分析し、わかりやすく表現する力を培うこと

東大附属は「総合学習の効果」(教示文:今年度の総合的な学習(「入門」「課題別」「卒業研究」)は、下の項目に対して、他の教科に比べてどれくらい効果があると思いますか。あてはまる項目を選択してください。5件法「1:ほぼ効果が見込めない〜5:特に効果がある」)。自由の森学園は「授業全般の効果」(教示文:今年度の授業のなかで、それぞれの履修形成にどのくらい効果がありましたか。それぞれについて、あてはまる項目を選択してください。5件法「1:全く効果がない〜5:特に効果がある」)。

「効果がある/特に効果がある」の回答割合

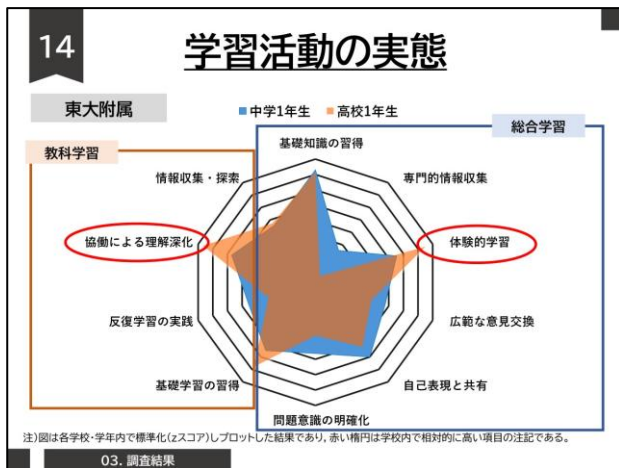
東大附属と自由の森学園ともに、①と②が最も高かった

【全ての項目で6割以上の生徒が「効果がある」と回答(項目によっては8割以上)】

03. 調査結果

Slide 13

次に、学習活動の実態についてです。このレーダーチャートは素点そのものではなく標準化した値を用いて、各学校・学年間の構造的な特徴を理解するために作成したものです。東大附属では総合学習と教科学習を分けて尋ねていますが、中1・高1ともに「体験的学習」が高い傾向を示しました (Slide 14)。教科学習では「協働による理解深化」が高い結果となっています。



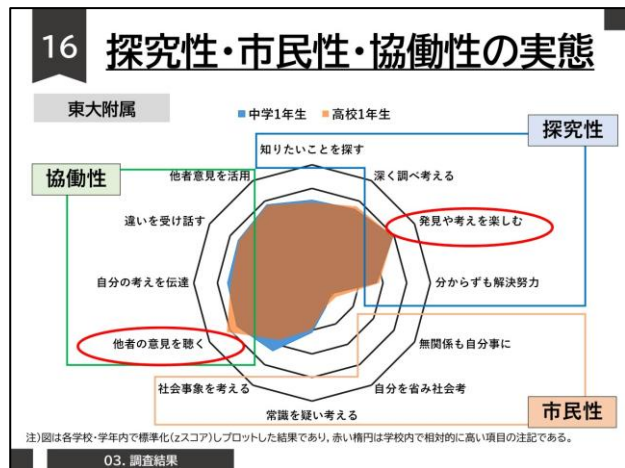
Slide 14

自由の森学園では、「基礎知識の習得」と「体験的学習」が高い傾向を示しました (Slide 15)。他の項目でも高い値を示しているものが多く、ここで示しているのはあくまでも項目間のバランスである点にご留意ください。



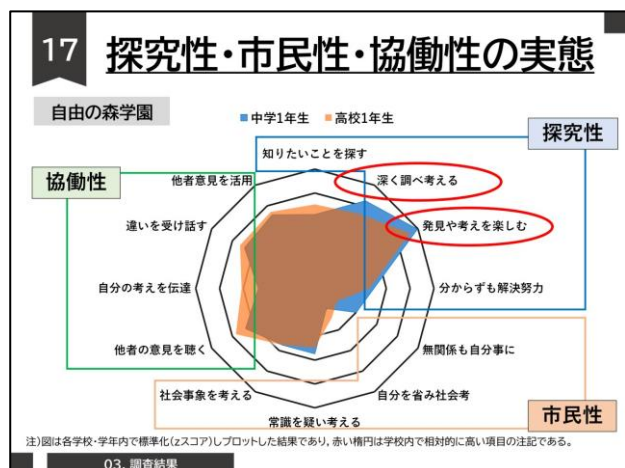
Slide 15

探究性・市民性・協働性の結果です。東大附属では探究性の「発見や考えを楽しむ」、協働性の「他者の意見を聴く」に高い傾向が見られました (Slide 16)。



Slide 16

一方、自由の森学園では、探究性の「深く調べ考える」「発見や考えを楽しむ」に高い傾向が見られました (Slide 17)。



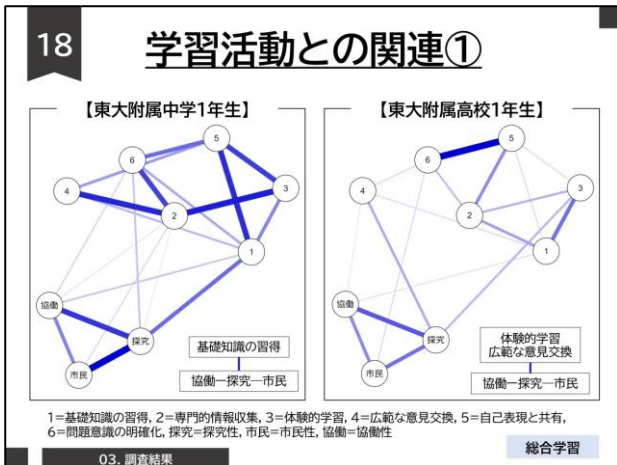
Slide 17

いずれの学校も市民性は他の項目と比べて相対的に低い結果が見られました。ただし、高いから良い、低いから悪いのではなく、それぞれのバランスや状況、何との関連で捉えるかによって資質の意味が変わっていく点は注意が必要です。

ネットワーク分析の結果です。①～⑥は学習活動の項目で、探究性・市民性・協働性はそれぞれ構成する項目の合計得点を使用しています。具体的な数字に対する学習活動は下記にあります。

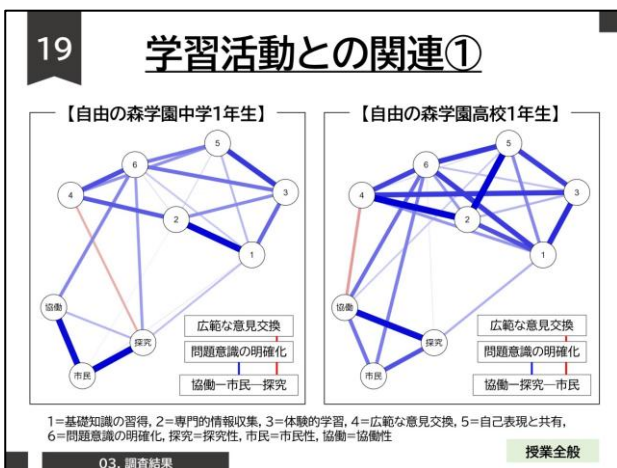
まず、東大附属における総合学習と探究性・市民性・協働性との関連についてです (Slide 18)。各学年ともに学習活動同士、そして探究性・市民性・協働性の間に関連が見られ、探究性と協働性が軸

になっているように見受けられます。中1では、「基礎知識の習得」が探究性と関連を示しています。細い線は推定上の不確実性が高いため、参考程度に捉える必要がありますが、高1では「体験的学習」と「広範な意見交換」に探究性と弱い関連が見られました。



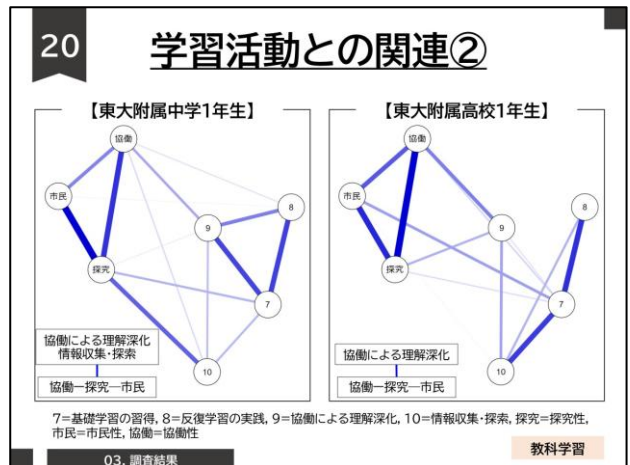
Slide 18

次に、自由の森学園の結果です (Slide 19)。自由の森学園では授業全般について尋ねていますが、東大附属と同様、各学年とも学習活動同士、探究性・市民性の間に一定の関連が見られ、特に探究性が軸になっているように見受けられます。中1では、「問題意識の明確化」が探究性と協働性に関連していました。高1では、「問題意識の明確化」が市民性と協働性に関連しています。いずれの学年でも「広範な意見交換」が探究性や協働性と負の関連を示していました。



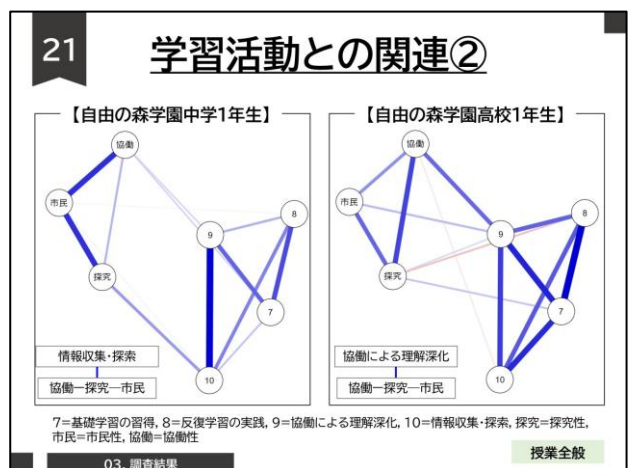
Slide 19

次に、東大附属の教科学習と探究性・市民性・協働性との関連についてです (Slide 20)。いずれの学年も協働性と探究性の関連が色濃く表れています。中1では、「情報収集・探索」が探究性と関連し、「協働による理解の深化」が協働性と弱い関連を示していました。高1では、「協働による理解の深化」が協働性に関連し、探究性でも弱い関連が見られました。



Slide 20

自由の森学園では、いずれの学年でも探究性が軸となっていました (Slide 21)。中1では、「情報収集・探索」が探究性と弱い関連を示していました。高1では、「協働による理解の深化」が協働性と関連し、市民性とは弱い関連を示していました。「反復学習の実践」は、探究性と負の関連を若干示していました。

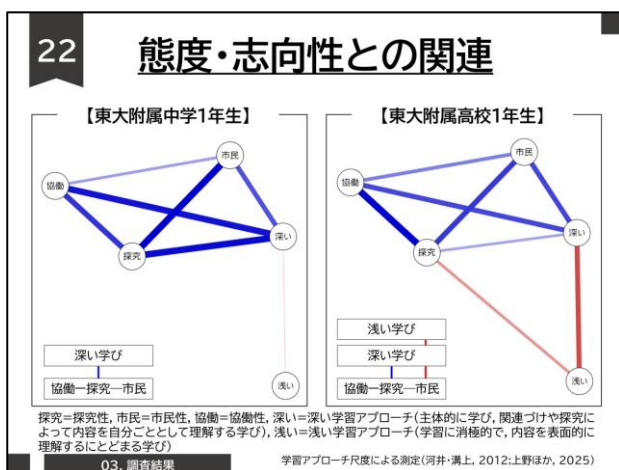


Slide 21

探究性・市民性・協働性を切り口に学習活動との関連を見てきましたが、これらの資質が深い学びとどのように関係しているのかというのは重要な視点

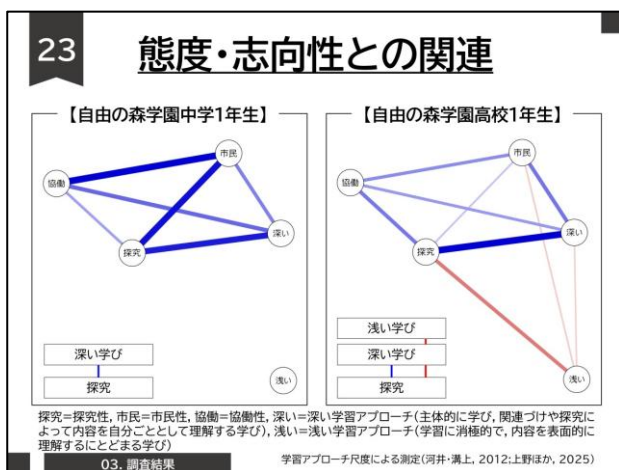
になります。ここでいう深い学びとは、主体的に学び、関連付けや探究を通して内容を自分事として理解していく学びを指します。一方で浅い学びとは、学習に対して消極的で、内容を表面的に理解する学びのことで、学習アプローチの項目についても、合計得点を算出し、それぞれデータとして分析を行っています。

東大附属では、探究性と協働性が結びつきながらも、深い学びにつながっている様子が見られました (Slide 22)。高1では、深い学びと浅い学び、探究性と浅い学びは負の関連を示し、中1では関連がありませんでした。



Slide 22

自由の森学園でも、探究性の高さが深い学びと関連しており、浅い学びとは関連しない、もしくは負の関連が見られました (Slide 23)。



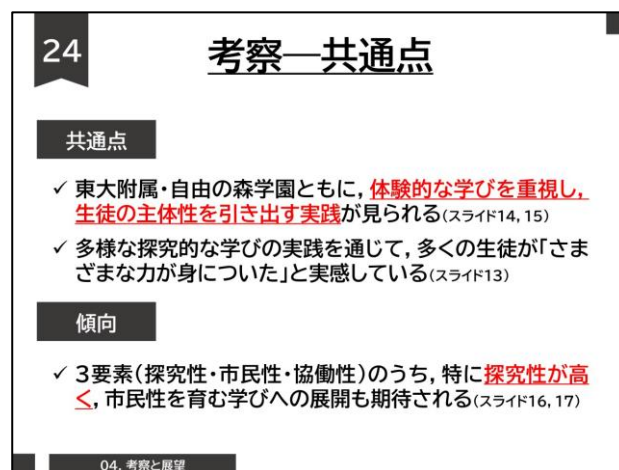
Slide 23

このように、同じ項目を用いた分析であっても東

大附属と自由の森学園の間で共通して見られる部分とそうでない部分が、わずかですが見えてきました。

4. 考察と展望

本共同調査から見えてきた両校の共通点として、探究的な学びの多様性の視点においては、体験的な学びを重視し、生徒の主体性を引き出す実践が見られました (Slide 24)。多様で探究的な学びの実践を通じ、多くの生徒がさまざまな力が身に付いたと実感している様子も確認できました。さらに、探究性・市民性・協働性の三つの要素のうち、特に探究性が高い傾向が示唆されました。



Slide 24

そうした特徴の中で、ネットワーク分析からは共通して見られつつも、各校ならではの点も見えてきました (Slide 25)。東大附属では、他者との協働を通じた探究性が際立っており、対話的・協働的な学びが深まっている様子が見られました。一方、自由の森学園では、多様な学び方を尊重しながら、個々の関心に根ざした多彩な探究活動が行われている様子が見られました。同じ探究的な学びであっても資質や志向性との結び付きには違いがあり、深い学びにつながるアプローチにも多様性があることが考えられます。

25 考察—独自性

東大附属の特徴

- ✓ 他者との協働を通じた探究性が際立っており、対話的・共同的な学びが深まっている(スライド18, 20)

自由の森学園の特徴

- ✓ 多様な学び方を尊重しながら、個々の関心に根ざした多彩な探究活動が行われている(スライド19, 21)

同じような探究的な学びであっても、**資質や志向性との関連に違いが見られ、深い学びにつながるアプローチにも多様性があることが示唆された(スライド18-23)**

04. 考察と展望

Slide 25

必ずしも同じ探究学習を行えば同じ結果が得られるわけではありません (Slide 26)。例えば、教師の関わり方によってその関連の在り方は変わってくるかもしれませんし、クラスの雰囲気や学年の違いによっても変わる可能性があります。さらには生徒の特性や学校の環境によっても、見え方は変わるかもしれません。

26 探究学習とアウトカム

探究学習 (A) → ? → 学校の目標 (C:アウトカム)

Q. 探究学習と学校の目標の変数間は、一定の関連があるのか？

➢ 探究の内容を導入しても効果が必ず出るとは限らず、**同じ内容に取り組ませても学校によって成果が異なる可能性がある**

【①媒介要因を考えてみる】 【②調整要因を考えてみる】

例えば、

- 教師の関わり方が重要
- クラスの雰囲気的重要
- 学年によって変わる
- 生徒の特性によって変わる
- 学校の環境によって変わる

04. 考察と展望

Slide 26

特に探究学習の効果を引き出すためには、生徒のレベルに応じた支援が必要であり、その支援の大きさや内容によって効果の表れ方が異なることも報告されています (Slide 27)。さらに、学習者の先行知識の状態によっては、手厚く支援し過ぎることがかえって逆効果になる場合があることも指摘されています。そのため、生徒の状態に応じて支援の在り方を考えていくことが重要になります。

27 探究学習の効果を引き出す

- 探究学習は、実践するだけで効果が得られるものではない
- 探究学習は万能ではなく、**効果が発揮される条件**を考える

ガイドを考える	生徒の特性を考える
初心者には、構造や支援のない「ほぼガイドなし」の探究は非効率であり、レベルに応じた guided inquiry が重要である <small>(Kischner et al., 2006; Lazonder, 2016)</small>	学習者の先行知識によって、手厚い支援が有効になる場合と、逆に支援が少ない方が効果的になる場合がある <small>(Tetzlaff et al., 2025)</small>

探究学習では、生徒の学びを支える**教員の関わり方**が重要

04. 考察と展望

Slide 27

たとえ同じ探究学習の効果を見ようとしても、そこに影響する要因はさまざまに存在します (Slide 28)。それが学校レベルなのか、クラスレベルなのか、あるいは個人レベルなのかというのも一様ではありません。探究学習が混沌として見えるのは、学校の中だけで捉えようとしていることにも一因があると思います。だからこそ、他校と協働しながら見ていくことの重要性があると私は考えます。

28 マルチレベルな理解

【本研究の結果から】 **同じ探究学習の内容でも、学校によって効果や関連が異なるのはなぜか？**

【学校】 A校 B校 ...

【クラス】 GA GB ... Gn GA GB ... Gn

【個人】 A B C D E F ... n1 n2 n3 A B C D E F ... n1 n2 n3

04. 考察と展望

Slide 28

例えば、学校の中で当たり前に行っている実践は、先生方にとっては日常のことであり、その価値になかなか気が付きにくいこともあります。しかし、他の学校と比較することで、実はそれが大きな特徴だったということが見えてくる場合もあります。

そうした意味で、今回の調査にはさまざまな意義があると感じています (Slide 29)。現在地を理解するという意味もありますし、そうかと納得する結果も

あれば、そんな結果になるのかと驚く点もあるかもしれません。それに協働で取り組むことで、見える幅が広がるように思います。

29 調査の意義を考える

①現在地理解
自己評価を通して自身や自校の現在地を把握するための手がかりとなる

③相互理解の深化
共同で調査を行うことで、相互の文脈を踏まえた理解が進み、自校の特徴が見えてくる

②視野の拡張
結果には想定通りのものだけでなく、**想定外の結果が含まれ、新たな問いを生むことがある**

④解釈と議論への接続
結果はそれ自体で結論を示すものではなく、文脈を踏まえた議論を通じて理解する必要がある

【調査の限界】調査は実態の一面を捉えるものであり、方法論上の制約や限界がある

04. 考察と展望

Slide 29

ただし、ここまでお話ししてきた内容は、あくまでも一研究者としての見方に過ぎません。調査で本当に大切なのは、当事者が感じていることに耳を傾けることだと考えています。この結果から何か結論を導き出すことが目的ではなく、各校の状況を踏まえながら、議論を通して理解を深めることが重要になります。

この後、コメンテーターの先生方3名に登壇いただきますが、正直なところ、この分析結果は解釈が難しいところがいっぱいありました (Slide 30)。特に、共同調査を行う上で数値は非常にセンシティブなものであり、今回問題となるのは探究的な学びの構造であるため、新たにネットワーク分析によって迫ってきました。コメンテーターの先生方にぜひ聞いてみたいのは、「今回の調査項目や分析の切り口は、現場の実践の実態や先生方の経験と照らし合わせて妥当と感じられるか」「学習活動や生徒の資質の違いは両校のカリキュラムや探究に取り組む構造、教員からの支援、生徒の志向性の違いによるものなのか」「今回のような資質と学習活動の実態やネットワーク構造の違いは、学校の探究カリキュラムを検討する上で有効な視点となるか」「今回の分析結果は一部分にしか過ぎないため、探究的な学びの実践の多様性を分析モデル(研究)にどのように組み込んでい

くべきか」ということです。差し支えなければ、この後のコメンテーターの先生方のコメントや対話で議論できればと思っています。

30 さらに結果の解釈

正直なところ、分析の妥当性や解釈は非常に難しいところがあります(解釈が無理やりな部分も)...

【コメンテーターの先生方に聞いてみたい!】

- ✓ 今回の調査項目や分析の切り口は、現場の実践の実態や先生方のご経験と照らし、妥当と感じられますか?
- ✓ 学習活動や生徒の資質の違いは、両校のカリキュラムや探究に取り組む構造、教員からの支援、生徒の志向性(特性)の違いによるものでしょうか?(同じ項目であっても、学習への取り組み方や意味づけが異なる?)
- ✓ 今回のような「資質と学習活動の実態」や「ネットワーク構造の違い」は、学校の探究カリキュラムを検討する上で有効な視点となるでしょうか?
- ✓ 探究的な学びの実践の多様性を分析モデル(研究)にどのように組み込んでいくべきでしょうか?

04. 考察と展望

Slide 30

最後に、本調査の限界について触れたいと思います (Slide 31)。本調査では、まだ捉え切れていない点や十分に分析し切れていない点が多くあります。例えば、教師の具体的な関わり方や授業中のやりとり、クラスの雰囲気といった質的な側面までは、今回のデータからは十分に把握できていません。また探究性・市民性・協働性は、教科学習や総合学習だけで形づくられるものではなく、課外活動や学校・家庭などの環境要因、個人内の特性、さらにはライフイベント等、さまざまな要因が複雑に影響し合っているものでもあります。さらに、対象学年が限定されていることや質問紙調査という方法の制約、調査設計上の交絡の問題もあり、実際の実践の全てを反映できているわけではありません。

31 調査の限界と課題

- 調査デザインの限界 (調査項目・横断調査・交絡要因の調整など)
- 属性 (例えば、全学年) によるネットワークの違い
- 教員の関わりや学校の環境など他の要因も含めたネットワークの再検討

様々な学校との共同な取り組みを検討

04. 考察と展望

Slide 31

そのため、本結果はあくまでも一つの視点に過ぎず、今後さらに多様なデータや視点を組み合わせながら丁寧に検討していく必要があると考えます。この共同調査自体、まだ始まったばかりであり、分析の枠組みや解釈の仕方についても粗削りな部分が多く残っていると感じています。だからこそ、本日は皆さまからご意見を頂き、この研究をより良い形に育てていければと考えています。

特に探究学習の実践は本当にさまざまで、今回ご紹介した2校の取り組みもその一部に過ぎません (Slide 32)。他にも多様な実践や工夫が全国のさまざまな学校で行われています。だからこそ、今回のような取り組みをきっかけに、学校の枠を超えてそれぞれの実践を持ち寄り、探究的な学びの姿と一緒に見ていくことが大切ではないかと感じています。

32 探究的な学びの多様性

注) 高校で実施されている「探究」の分類図。

探究の実践は多岐にわたり、玉石混交とも言える状況にあるが、そのアプローチの違いによって学びの深まりや育まれる資質にも差異が生じる可能性がある

04. 考察と展望

Slide 32

そのため、今後はより多様な学校における探究的

な学びの特徴やその変化の過程を継続的に追っていきたいと考えています (Slide 33)。まだ始まったばかりの取り組みですが、今後さらに多くの学校と連携しながら、この調査と議論の輪を広げていければと思っています。

33 今後の課題と展望

多様な学校における探究的学びの特徴とその変化を追跡調査

パネルデータ (時系列データとクロスセクショナルデータの組み合わせ) を蓄積していくことで...

生徒のパターン変化を捉え、「個別最適な学び」の支援設計へ活用できる可能性

04. 考察と展望

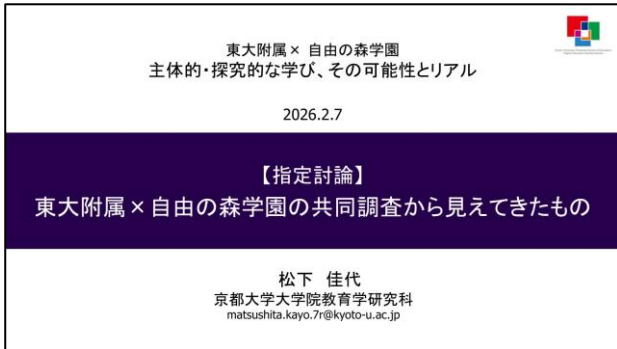
Slide 33

指定討論「東大附属×自由の森学園の共同調査から
見えてきたもの」

松下 佳代（京都大学教育学研究科教授）

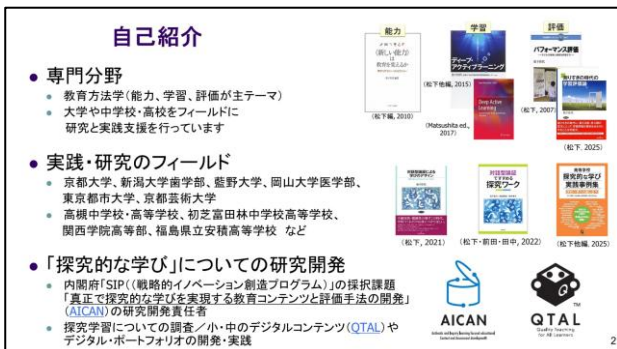
對比地 覚（東京大学教育学部附属中等教育学校教諭）

宇都宮 和音（自由の森学園中学校・高等学校教諭）



松下氏コメント

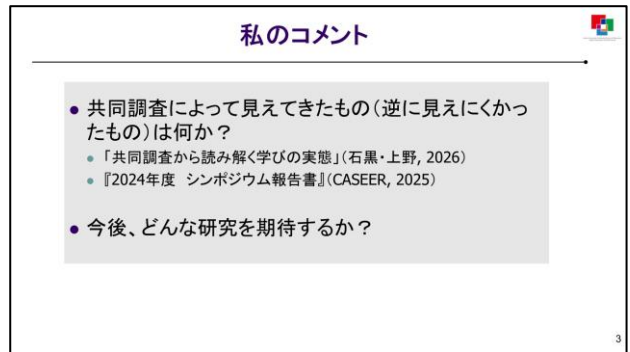
私は元々、初等・中等教育を研究しており、2002年に京都大学の高等教育のセンターに移って以降は大学教育にも携わってきました（Slide 1）。特に探究的な学びについては、内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）の一プロジェクトとして、「真正で探究的な学びを実現する教育コンテンツと評価手法の開発」（AICAN）の研究開発責任者を務め、探究学習について調査しています。デジタル・ポートフォリオの開発や、デジタルコンテンツを共有するためのウェブサイトQTALの運営も行っています。



Slide 1

私からは、共同調査によって見えてきたもの、逆に見えにくかったものは何か、そして、今後どんな

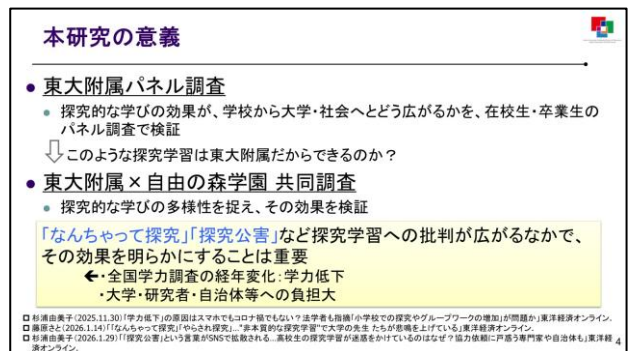
研究を期待するかということについてお話しします（Slide 2）。



Slide 2

1. 本研究の意義

東大附属のパネル調査は長い年月をかけて行われてきており、探究的な学びの効果が学校から大学・社会へとどう広がるかということを在校生・卒業生のパネル調査で検証しています（Slide 3）。パネル調査は、最初は多くの人数で始めても、最終的にはかなり少人数になったりして、追跡するのは大変ですが、ここまで本当によくやられているなと思います。ただ、このような探究学習は東大附属だからできるのではと言われることもあり、今年は東大附属と自由の森学園の共同調査を行われたということでした。



Slide 3

本田先生のご挨拶にもありましたが、探究学習に対する批判が最近割と強くなってきており、「なんちゃって探究」「やらされ探究」といった言葉も使われています。全国学力・学習状況調査の経年変化を見ると学力が低下していることから、その原因になっているのではないかといわれたり、大学・研究者・自治体などが探究学習のインタビューや質問紙調査に応じるのに時間や労力を取られてしまう

ため、「探究公害」などともいわれているようです。

ただ、探究学習にそうした批判があるからといって、以前のような学習に戻ればいいというわけではないと思います。そこをきちんと議論するために、探究学習がどのように生徒の学びや成長をもたらしたのかということ、こうした調査によって実証的に明らかにすることは非常に大きな意味があります。教育には遅効性がある、長い年月をかけてようやく効果が見えてきたり、その時々で効果の見え方が違ったりします。そうした点からも、このパネル調査には意味があると思っています。

2. 共同調査の方法について

ここからは、先ほどのご報告に対してお話していきます。以下のスライドでは、白枠が上野さんのお話しになったことで、グレーの枠が私のコメントです。

共同調査の方法(1)

<ul style="list-style-type: none"> ● 対象者 <ul style="list-style-type: none"> ● 東附(一貫制): 中1・高1 ● 自森(非一貫制): 中1・高1 ● 調査項目 <ul style="list-style-type: none"> ● 学習活動: 10項目(①~⑥+⑦~⑩) ● 資質: 3群×4項目(探究性、市民性、協働性) ● 学習アプローチ: 深い/浅い ● リサーチクエスション(RQ) <ul style="list-style-type: none"> ● (1. 学習の効果) ● 2. 学習活動と資質(探究的市民)の実態 ● 3. 学習活動と資質の関係 	<ul style="list-style-type: none"> ● 対象者 <ul style="list-style-type: none"> ● 東附は中1と高1が比較可だが、自森は不可 → 自森にそろえる ● 調査項目 <ul style="list-style-type: none"> ● 東附は教科と総合の両輪だが、自森は高校では区別なし → 自森にそろえる
--	--

Slide 4

今回の対象者は東附と自森の中1と高1ですが、東附は一貫制、自森は非一貫制です。どちらも一貫制であれば中1と高1の比較ができるのですが、両校の違いからそれはできていません。調査項目に関しても、東附は教科と総合で分かれています、自森は特に高校でそういう分け方がないため、比較に制限が生まれています。

分析方法としては、「学習活動と資質の実態」については調査結果を標準化、つまり平均がゼロになるようにしてレーダーチャートで表示されています(Slide 5)。「学習活動と資質の関係」については心理ネットワークアプローチという比較的新しい分析方法が使われており、興味深いチャレンジだと思いま

す。

共同調査の方法(2)

<ul style="list-style-type: none"> ● 分析方法 <ul style="list-style-type: none"> ● 学習活動と資質(探究的市民)の実態(RQ2) <ul style="list-style-type: none"> → 各学校・学年内で標準化して、レーダーチャート表示 ● 学習活動と資質の関係(RQ3) <ul style="list-style-type: none"> → 心理ネットワークアプローチ → 学習活動を①~⑥と⑦~⑩に分けて分析 <ul style="list-style-type: none"> ● 学習活動間、資質間、学習活動-資質間 ● 東附と自森の違い <ul style="list-style-type: none"> ・ 東附: ①~⑥(総合)、⑦~⑩(教科) ・ 自森: ①~⑥(全授業)、⑦~⑩(全授業) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 分析方法 <ul style="list-style-type: none"> ● 各学校・学年内で標準化 <ul style="list-style-type: none"> → 絶対値ではない → 中1と高1で比較できない ● ①~⑥と⑦~⑩に分けて分析 <ul style="list-style-type: none"> → ①(基礎知識の習得)と⑦(基礎学習の習得)、②(専門的情報収集)と⑩(情報収集-探索)は重複しているように見えるが、仕方ないか → 東附: ③(体験的学習)が教科の学習活動から欠落
--	--

Slide 5

先ほどもお話があったように、レーダーチャートでは中学校と高校が重ねて表示されているので、この項目は中学校の方が高いといったように見えてしまいかもかもしれませんが、直接比較はできません。あくまでも、どこに強みがあって、どこがあまり高くないかという相対的な位置しか分からないということを念頭に置いておく必要があります。

3. 結果について

学習活動の実態に関しては、今申し上げたように両校とも中1と高1の得点の違いは分かりません(Slide 6)。特に東附は同じ生徒なので比較もできると思うのですが、伸びは分かりません。

結果(1)-学習活動の実態-

<ul style="list-style-type: none"> ● 学習活動の実態 <ul style="list-style-type: none"> ● レーダーチャート(S16・17) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習活動の実態 <ul style="list-style-type: none"> ● 両校ともに、中1と高1の得点の違い(東附:伸び)はわからない ● レーダーチャートの形から、各学校・学年の学習活動の特徴を把握 <ul style="list-style-type: none"> ● 共通点 <ul style="list-style-type: none"> ● 【体験的学習】【協働による理解深化】+【基礎知識の習得】を重視。 ● 【専門的情報収集】は低い。 ● 独自性 <ul style="list-style-type: none"> ● 東附: 今後、総合学習が発展していくと変化か? ● 自森: 中1で【専門的情報収集】が高い ● ……総合「森の時間」の影響か?
--	--

Slide 6

レーダーチャートの形から分かるのは、各学校・学年の学習活動の特徴です。共通点としていえるのは、「体験的学習」や「協働による理解深化」「基礎知識の習得」が重視されているということです。一方、「専門的情報収集」は比較的低くなっています。

各校の独自性に関しては、東附の方は今後、学年が上がるにつれて総合学習が発展していくと変化していくのではないかと考えられます。東附は卒業論

文が非常に特徴的な部分ですので、ここが変わっていかかもしれません。自森は、中1で「専門的情報収集」が高くなっています。もしかしたら、総合の「森の時間」の影響かと思いますが、このあたりはもう少し深掘りしないとよく分かりません。

資質（探究性・市民性・協働性）の実態については、こちらも両校ともに中1と高1の得点の違い（東附は伸び）は分かりませんが（Slide 7）、レーダーチャートの形から、それぞれの資質の特徴を把握することはできます。

結果(2)ー資質(探究性・市民性・協働性)の実態ー

<p>● 資質の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ● レーダーチャート(S16・17) 	<p>● 資質の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 両校ともに、中1と高1の得点の違い(東附:伸び)はわからない ● レーダーチャートの形から、各学校・学年の資質の特徴を把握 <ul style="list-style-type: none"> ● 共通点(両校、両学年とも) <ul style="list-style-type: none"> ・【探究性】【協働性】が相対的に高く、それらと比べると、【市民性】が相対的に低い ・「市民性を育む」を目標としている東附、生徒自主活動の盛んな自森からすると、意外な結果 <ul style="list-style-type: none"> ・【市民性】の絶対値ではない ・高3まで見ないとわからない?
---	--

Slide 7

共通点としては、両校、中1・高1ともに探究性と協働性が相対的に高く、市民性が相対的に低いという結果が出ています。両校とも市民性を育むことを重視しており、特に生徒の自主活動が盛んな自森からすると、意外な結果でした。ただし、これも市民性の絶対値ではないので、注意する必要がありますし、高3まで見ないと分からないところもあると思います。

続いて学習活動と資質の関係です（Slide 8）。心理ネットワークアプローチで分析されていますが、東附と自森を比較したときに、両校とも「協働による理解深化」が資質の形成に効いています。また自森では、高1の方が学習活動間、学習活動と資質間の結びつきが強く、これは東附と異なります。「広範な意見交換」は、東附の高1では探究性と正の相関があるのに対し、自森では探究性や協働性と負の相関があります。改めて質問項目を見てみると、「友達や専門家ではない人に意見を聞いたり、質問したりする」となっており、意見交換というより、どちらかといえば意見聴取に近いので、このような結果にな

ったのかもかもしれません。

結果(3)ー学習活動と資質の関係ー

<p>● 学習活動と資質の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 心理的ネットワーク <ul style="list-style-type: none"> ● ①～⑥(S18・19) ● ⑦～⑩(S20・21) 	<p>● 学習活動と資質の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 各学校・学年についての分析は、報告どおり ● 東附と自森の比較 <ul style="list-style-type: none"> ● 両校とも、⑨【協働による理解深化】が資質の形成に効いている ● 自森では、高1の方が、学習活動間、学習活動-資質間の結びつきが強い ⇔ 東附 ● ④【広範な意見交換】の違い: 東附(高1)では探究の正の相関、自森では探究・協働と負の相関...意見交換より意見聴取に近いため? <ul style="list-style-type: none"> cf. ④友達や専門家ではない人に意見を聞いたり、質問したりする
---	---

Slide 8

学習アプローチと資質の関係です（Slide 9）。「態度・志向性」と書いてあったのですが、その中でも学習アプローチに限定されています。東附と自森ともほぼ同じ傾向が出ており、深い学びはどの資質とも強い正の相関があります。そして深い学びは浅い学びと当然ながら負の相関があり、浅い学びは特に探究性と負の相関があります。これは予想通りで、非常にきれいな結果が出ています。特に東附では、ディープ・アクティブ・ラーニングを進めてきたことの適切さが確かめられたのではないかと思います。

結果(4)ー学習アプローチと資質の関係ー

<p>● 学習アプローチと資質の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 心理的ネットワーク(S22・23) 	<p>● 学習活動と資質の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 各学校・学年についての分析は、報告どおり ● 東附と自森の比較(両校ともほぼ同じ) <ul style="list-style-type: none"> ● 【深い学び】はどの資質とも強い正の相関 ● 【深い学び】は【浅い学び】と負の相関 ● 【浅い学び】は特に【探究性】と負の相関 ● これらの結果は予想どおりであり、特に東附で「ディープ・アクティブ・ラーニング」を進めてきたことの適切さが確かめられた
--	--

Slide 9

さらなる結果の解釈について、先ほど上野さんからコメンテーターの先生方に聞いてみたいことが挙げられていました。「探究的な学びの実践の多様性は捉えられたか」という問いについて考えるために、冒頭に挙げた AICAN のプロジェクトの内容を少しご紹介したいと思います。こちらでは全国23の高校を訪問調査しています（Slide 10）。それを見ると本当にさまざまな探究があることが分かります。大学の学問・科学研究を遂行しているような探究もありますし、地域と連携したり、地域の課題解決に参画したりするような探究もあります。農業高校や水産学

科などの専門学科でも非常に特徴的な探究が行われています。

「さらなる結果の解釈」について

●「探究的な学びの実践の多様性」は捉えられたか？

● cf. 松下他編『高等学校 探究的な学び実践事例集』…全国23校の調査報告

<p>➢ 探究のスタイル</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本格的な学問・科学研究を遂行する探究 ● 地域と連携したり、地域の課題解決に参画したりする探究 ● 社会問題の解決や究明に取り組む探究 ● 企業との共同開発を行う探究 ● 自身が関心を持つテーマをとことん調べていく探究 ● 自分の生き方に向き合う探究 ● 専門学科の強みを活かして行う探究 ● 特定の理論に根ざして展開する探究 など 	<p>➢ 探究のスタイルの違いを生み出す要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 3つの志向のどれに重点を置くか <ul style="list-style-type: none"> ● 学問(専門研究志向) ● 社会(社会参画志向) ● 自己(生き方探究志向) ● …どこかの志向に軸足がありつつも、すべての志向が有意義に組み込まれている
--	---

□ 松下佳代・石井美真・奥村好美・石田智哉編(2025)『高等学校 探究的な学び実践事例集—次の一手への道しるべ—』学事出版 11

Slide 10

探究のスタイルの違いを生み出す要因として、これはカリキュラム研究でよくいわれることですが、学問と社会と自己(学習者)のどこに重点を置くかということがあります。どれかに重点を置きつつ、あとの二つも無視することはできないのですが、その重みづけやバランスのとり方が探究のスタイルの違いにつながっています。

そうして見ると、今回拾い上げられたような質問項目以外にも探究実践を左右するポイントがかなりあると思います(Slide 11)。総合と教科の関係はどうなっているか、テーマと問いをどのように立ち上げるか、探究のノウハウをどのように教え学んでいくのか、探究実践において教師はどのような役割を果たすか、探究的な学びの過程と成果をどのように可視化(評価)するか、探究指導のカリキュラム・マネジメント(校内の体制づくり)をどのように行うのか。こういったことも、多様性を捉えるときには必要な視点になると思います。

●「探究的な学びの実践の多様性」は捉えられたか？(つづき)

● cf. 松下他編『高等学校 探究的な学び実践事例集』…全国23校の調査報告

➢ 探究実践のポイント

- ①総合と教科の関係は？
- ②テーマと問いをどのように立ち上げるか？
- ③探究のノウハウをどのように教え、どのように学ぶか？
- ④探究実践において教師はどのような役割を果たすか？
- ⑤探究的な学びの過程と成果をどのように可視化するか？
- ⑥探究指導のカリキュラム・マネジメントをどう行うか？
 - …リーダーシップ発揮型/教員組織連携体制構築型/文化醸成型/カリキュラム開発・改善の仕組み創出型/外部連携・協働型/外部支援活用型

□ 松下佳代・石井美真・奥村好美・石田智哉編(2025)『高等学校 探究的な学び実践事例集—次の一手への道しるべ—』学事出版 12

Slide 11

4. 本研究の課題と展望

東附と自森は随分違うというお話もありましたが、いま見てきたような日本全国の高校の中で捉えると、相対的には両校の理念や方法は似ていると感じられます(Slide 12)。その上で東附と自森それぞれの独自性を捉えるという目的からすると、本研究の調査項目は粒度が少し粗く、種類も不足しているのではないかと思います。

本研究の課題と展望

● 1. 調査項目

- 東附と自森は、理念や方法が相対的に類似
- その中で両校の独自性を捉えるという目的からすると、調査項目の粒度が粗く、また種類が不足しているように思われる
 - 質的調査(インタビュー、フィールドワーク、当事者による語り)から得られた豊かな情報が十分反映されていないのでは？
 - 東附…カリキュラムに特徴(総合学習の3段階のカリキュラム、教科と総合の両輪)
 - 自森…評価に特徴(点数評価なし、評価表による学習記録、表現の重視)
 - 学習活動の追加項目(例)
 - 「探究の段階の見通しが示され、それを意識して学習を進めた」
 - 「教科の学びと教科以外の学びを結びつけて考えていた」
 - 「学習の記録を継続的に作成・更新した」
 - 「テストだけではなく、作品(文章、ポスター、美術作品など)や表現(プレゼン、身体表現など)で学習成果を確かめた」

13

両校の質的調査(インタビュー、フィールドワーク、当事者による語りなど)も行われてきたわけですが、そこで得られた豊かな情報がこの調査には十分に反映されていないのではないのでしょうか。例えば、東附はカリキュラムに特徴があり、自森は評価に特徴があります。私の方で、東附や自森の特徴を入れて、しかもその学校だけに特化した質問ではない形で項目を加えるとすれば、Slide 12に挙げたような項目がありうるのではないかと思います。例えば「テストだけではなく、作品や表現などで学習成果を確かめた」というのは、自森を意識していますが、東附にも当てはまるような質問項目です。

また、分析対象については、もっと異なるタイプの探究実践、例えば研究志向の強い学校や専門学科などと比較するのもありだと思います(Slide 13)。分析方法についても、学校の探究実践の成果を把握するという点からすると、やはり中1から高1への変化は見たいと思いました。自森については内部進学者だけを取り出して変化を見ることがあってもいいと思います。学習活動と資質の関係では、学習活動の調査項目を増やすことによってもう少し具体的に資質との関係が見られるかもしれません。また今回

は教科と総合の授業が対象でしたが、学習活動の中にそれ以外も含めた方がいいのではないのでしょうか。特に、行事や生徒会活動、生徒自主活動といった特別活動が市民性には関わっているのではないかと思います。

本研究の課題と展望

- 2. 分析対象
 - もう少し異なるタイプの探究実践を行っている学校(研究志向、専門学科など)との比較もやってみては？
- 3. 分析方法
 - 資質(各学校・学年内で標準化、レーダーチャート)
 - 中1と高1の変化を見る(自森については内部進学者のみ)
 - 学習活動と資質の関係(心理ネットワークアプローチ)
 - 学習活動の調査項目を増やすことによって、もう少し具体的に資質との関係が見られるかもしれない
 - 学習活動の中に、教科・総合の授業以外の学習活動も含めてはどうか？
 - 特に特別活動(行事、生徒会活動/生徒自主活動)は市民性に関わっている可能性あり

Slide 13

探究学習への批判が広がる中で、その実態と可能性を明らかにすることがいま本当に求められています(Slide 14)。特に在学中から卒業後までのパネル調査、しかも質的調査と量的調査の両方を行うことは他にはなかなかできないことであり、そういう意味でこの研究は非常に貴重だと思います。今後のさらなる研究の展開に期待しています。

今後への期待

- 探究学習への批判が広がるなかで、その実態と可能性を明らかにすることの意義
- 特に在学中から卒業後までのパネル調査(質的調査と量的調査の混合法)は実施困難であり、本研究は貴重

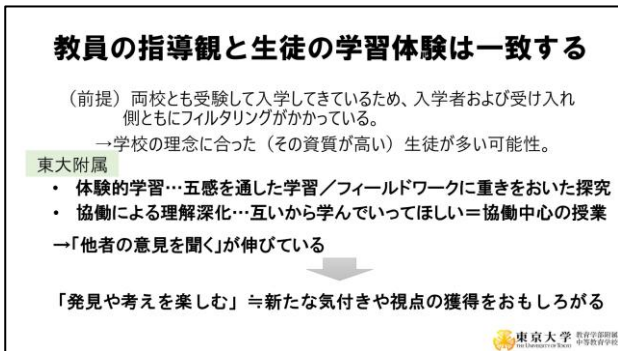
さらなる研究の展開に期待しています！

Slide 14

對比地氏コメント



上野先生の調査結果を拝見して最初に私が思ったのは、教員の指導観と生徒の学習体験は一致することです。教員が大事だと思っているものを生徒はしっかりと受け取ってくれているし、あるいは逆に受け取らされているのだと思います (Slide 1)。

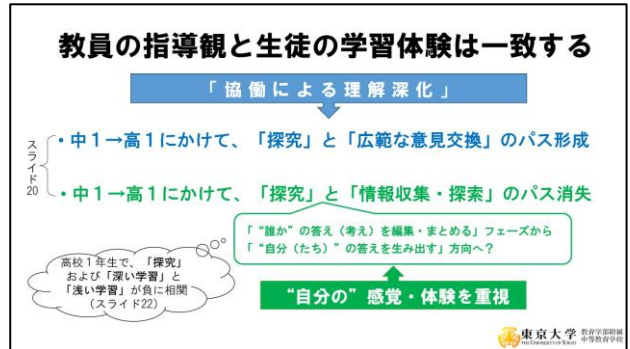


Slide 1

例えば「体験的学習」のスコアがかなり高くなっていますが、先ほど浅川先生から、ICT を使うにしても身体全体で表現し、身体全体で受け取るというご報告がありました。私たちとしても五感を通じた驚きや実際に行って見たものを大事にし、フィールドワークを大切にして探究させるようにしているので、生徒もそこをしっかりと行えたと感じているのだと思います。あるいは、コロナでオンライン授業もすごく検討されていましたが、私たちは基本的に1カ月実施したかどうかぐらいでした。やはり学びは他者がいないと成り立たないし、自分とは違う考えや見方を直接目によって広がったり、深化したりするので、そこを学校として非常に大事にしているところが表れたのだと思っています。

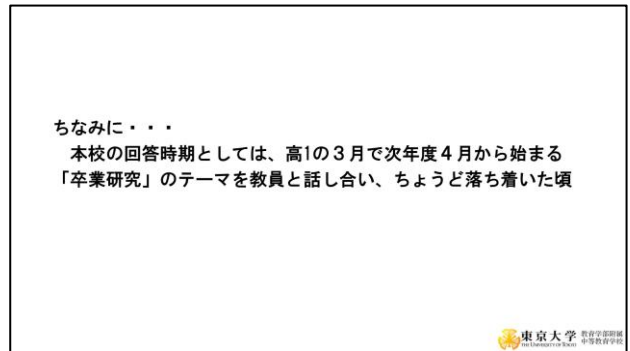
基本的には経年変化ではなくて比較にはなるので

すが、私たちが行ってきたことが特に高校1年生(4年生)に表れてきていると思います (Slide 2)。当たり前前のことですが、教員の「こういうことをやらせたい」「こういうことをやりたい」「こういうことが大事だよ」という思いが生徒にしっかりと届きますし、生徒はそれをしっかりと受け止めるのでしょ。ですから、教員の探究観や学習観が非常に問われてくるのではないかと思います。



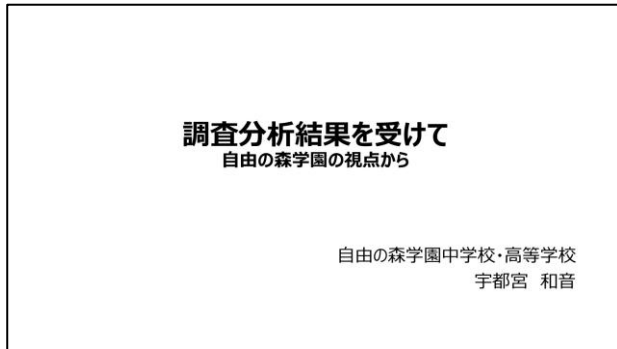
Slide 2

ちなみに補足として、高校1年生のパネル調査がちょうど3月に行われます。これは自分の個人研究型探究のテーマが決まり、ちょうど落ち着いた頃だということも頭の片隅に置いて見ていただけるといいと思います (Slide 3)。

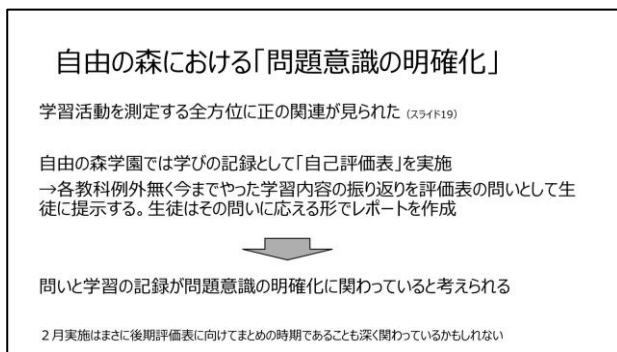


Slide 3

宇都宮氏コメント



本調査の分析結果を受けて、まず「問題意識の明確化」という項目で広い方向に関連が見られたことに関してですが、自由の森学園では学びの記録として、浅川先生のご報告にもありましたけれども、自己評価表というものを使用しています（Slide 1）。学習のまとめとして、生徒が自分の学習の中でどのようなものとの出会い、どのような変化があって、何を掴んだのか、これからこのようなことがあるといふという自己評価としての文章をレポートとしてまとめるのです。それに対して各教科の担当者が個別に答えていく、もしくは教員側から見えている生徒の姿を文章で返していくという取り組みをしています。

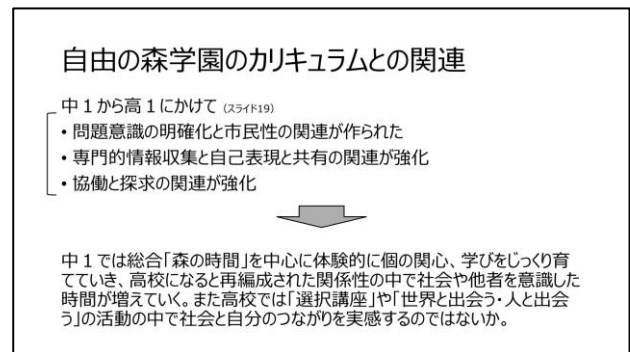


Slide 1

これは限定的に行われているものではなく、学校全体が同じ時期に一斉に実施する形でデザインして行っているものです。一般的な学校であればテスト期間に部活動などが休みになるのと同じようなデザインで、自己評価表に取り組むことを学校全体で行っているのです。約1週間前から放課後の活動はなくなり、みんな黙々と教室で評価表に取り組む姿があ

ります。そうした取り組みによって、自分の取り組みが何に向かっているのかが意識されるのではないかと思います。対比地先生の話にもありましたが、自由の森は2月末実施だったので、まさに年度末に自己評価表に取り組んでいるところも少し関わりがあるかと思います。

それから自由の森学園では、中学校には「森の時間」が設定され、今は高校においても探究のカリキュラムがいろいろ開発されていて、特に専門家を呼んだり訪ねたりして、自分の生き方を考えるような取り組みが、「世界と出会う・人と出会う」という名前で行われています（Slide 2）。そうした活動の中で社会と自分のつながりを徐々に実感していくと考えられます。



Slide 2

また東大附属と比較すると、自由の森は学年が上がると選択授業の幅、自分が新たに関わる世界が徐々に増えていき、一つの卒業研究のテーマに収れんするというよりもどんどん広がっていくという大きなカリキュラムの違いが見えてくると思います。

共同調査を踏まえた対話：コメンテーターとの対話
およびフロアからの質疑応答

コーディネーター：上野 雄己（CASEER 特任講師）
注. 質問者の匿名性を保つため、各質問者に対して質問者 1.2...という番号を付与した

（上野） ここからは、第 I 部の登壇者と共に探究的な学びの多様性について深めていきたいと思えます。共同調査の結果について、改めて研究者の視点、現場の視点、さまざまに貴重なご意見を頂き、ありがとうございました。調査結果にはいろいろな見方があるのだなと改めて思いましたし、本調査を進めるうえでここをもう少しやっておけば各学校の特徴がいろいろと見えていたのではないかと思うところもあって、むしろ先生方にもっとお力添えを頂きたいと思ったところがあります。私からも聞きたいことがいろいろありますし、既に先生方から私の問いに対して答えていただいたので、皆さまの問いと、先生方や私の調査結果のそれぞれを踏まえてディスカッションできればと思っております。

まずは事前質問に触れていながら、オンライン・対面それぞれの質問を取り上げていきたいと思えますが、非常に限られた時間となっています。恐らくそこまで質問を拾えないかもしれませんが、頂いた質問に関してこの場で答えられなければ、基本的に報告書での対応とさせていただきます。

改めて事前質問を確認すると、東大附属、自由の森学園それぞれに興味を持っている方は非常に多いという印象があります。現地参加に事前申し込みされた方々が約 110 名おり、そのうち各 2 割が両校の関係者ですが、それ以外は足元の悪い中、全国各地から本当にいろいろな方が来てくださっていて、各校の取り組みに興味を持たれている方が非常に多いのではないかと考えています。

事前のご質問は本当にいろいろあるのですが、まずは探究的な学びの多様性についてお尋ねしたいと思えます。探究学習が広がる中で、両校それぞれにおいてこのような学びが実現できている背景には、

その学校だからこそその要素があると感じています。実際に共同調査の結果も踏まえ、それぞれ関連が見られた部分や成果が見えてきているわけですが、恐らくそれぞれ独自のものがあり、それを他の学校がやろうと思ってもなかなか難しいと思います。そこはどのような点だと思いますか。対比地先生と宇都宮先生、浅川先生は自由の森学園と東大附属のどちらの教壇にも立たれているので、その経験も踏まえてお話しいただければと思います。

（対比地） 自森と同じになってしまう部分もあると思いますが、6 年間の中で結果を出せばいいというところではないかと思えます。高校受験もありませんし、6 年間の中でしっかりと生徒を育てる形で、余裕を持ってできています。私たちにとって、そこは生徒に任せていざらう、教員が全部やらなくていいだろうという取捨選択の「捨」の部分で、ここは面白いというところは時間をかけてやって、あとのところはあまり時間をかけないようにしています。よく 6 年生から「もっと受験勉強をフォローしてほしい」「授業でもっと受験の内容をやってほしい」という声は出てくると思うのですが、教員それぞれがこれは面白いぞというところをしっかりと掘って、そうでないところはばっさり切っています。自森もそこにじっくり時間をかけていると思えますが、どうでしょうか。

（宇都宮） 自由の森は 90 分授業で、一つの問いにまずはゆっくりじっくり向き合う時間が保障されていて、そうした時間的なデザインはもちろん深く関わっていると思います。加えて、クラス替えがなく基本的に 3 年間上がるので、一つの教科というよりは、常に生活を共にしながら同じ人たちと日常の中で関わっているということが、学校としての探究の姿を支えていると思えます。

（上野） 今までは東大附属 1 校だけだったので、東大附属の中での考え方のみでしたが、両校を比較

していく中で見えてくる部分がいろいろあります。まさに両校で教壇に立たれた浅川先生からご意見を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

(浅川) 少し別の観点ですが、入学者バイアスのようなものはあると思います。自由の森には、この学校で学びたいと言って全国から子どもたちが集まっていますし、東大附属ではこれまでのパネル調査を見ても中1の入学段階で探究や協働に高い親和性を持った子たちが多いです。募集活動の中でも、4人組でこういう授業を進めていきますということを中心に前面に出して、そこにびんと来てくださった親御さんがお子さんを学校見学に連れてきて、楽しそうだという流れができていないかという面があります。ただ、実践そのものは、どこでもできることをそれぞれやりたいように行っているだけという感じで、実践自体がここでなければできないことかという点、全然そうではないと思っています。

(上野) 実はオンラインからも、「それぞれの学校での探究の成果を比較しておられるのですが、入学している生徒の元々の傾向や適性は無視できない要因とされますので、その点を考察していただけると幸いです」という質問がありました。まさに入学者バイアスのようなものがあって、東大附属パネル調査では入学者調査も5~6年ほど行っているのですが、そのデータを見ても入学時点から探究性や協働性が高くなっているのです。

パネル調査を行っていくと事実を研究としてしっかり報告する形になるので、むしろ探究性が高い生徒ほど探究学習に取り組んでいるというパスの向きが見えてきているのです。本来であれば学習を通して探究性や市民性、協働性が養われるのですが、東大附属の場合はむしろ探究性、市民性、協働性が高いからその活動を行うというところも分析上明らかになっています。

自由の森に関しては入学者調査を行っていないの

で、その点については今後の検討になってくるかもしれませんが、今回のネットワークの構造を見てもどちらの因果かというのは見られません。あくまでも関連です。私たちは学習活動が探究性や市民性を養うという向きで見てしまっていますが、もしかしたらそれぞれの資質が活動に関係しているから成り立っているというふうに理解できるかもしれません。

ですので、それぞれの実際の学習活動自体は、浅川先生がおっしゃっているようにそれぞれができるようなものですが、その中にはもしかしたら生徒の特性やそれに応じた教員の関わり方が大事になってくるのではないかと考えています。

研究の視点から松下先生にいろいろなお質問があります。特に松下先生には、私の解釈が至らなかった点を細かく幾つも挙げていただいて、非常に勉強になりました。恐らく私の研究発表だけではよく分からなかったという先生方も、松下先生の解釈を通して改めて見えてきた部分も多かったのではないかと思います。

今回のシンポジウムは、ある意味で探究的な学びが大事だ、これからやっていく必要があるというふうにポジティブなメッセージと受け止めている方もいると思いますが、探究的な学びには両義性がある、良い部分と悪い部分があります。事前質問の中には懐疑的な質問も非常に多かったのです。例えば、「探究活動に時間を取られ、従来の学力が低下しているのではないかという意見もあります。入試の多くは従来の学力を測るものだと思いますが、このような意見に対してどのように考えればよいのか、ご意見をお聞かせください」という質問がありました。

去年、東大附属の高校3年生にご登壇いただいたのですが、その学生は赤裸々に「確かに探究学習は面白いけれど、入試には・・・」という形で、まさに對比地先生がおっしゃっていたようなコメントをしていました。学習指導要領において探究的な学びが大事だということがうたわれている中、松下先生が研究者の視点から考える探究学習の意義・価値・効果について改めてお聞かせいただければと思

ます。

(松下) 特に自森は総合と教科を分けずにやっているということですが、現行の学習指導要領においても各教科の中に「〇〇探究」ということで探究がかなり入ってきています。今日はそこまで細かい話はなかったのですが、教科での探究は、先生が探究するに値する問いを設定して、子どもたちにいろいろ考えさせることになると思うのです。総合は、未熟であっても子どもたちが自分で問いを立てることが教科の探究にはない面であり、これから大学または社会に入ったときに非常に必要になると思っています。それは多くの人が感じていることだと思いますが、そのときに時間が問題になります。

今日お話を伺っていて、自森の場合は「ゆっくりじっくり」というお話がありましたが、これは今の学校に一番欠けているものだと思います。「余白」ということが今度の学習指導要領改訂においても議論されていますが、探究を行っている学校をいろいろ見ても、急き立てられるようにやっているところもあります。先ほども糸を紡ぐのにすごく時間をかけてやっているという話がありましたが、あのようなことは小学校まではまだ結構あるのですが、中高ではあまりないでしょう。東附についても、6年間かけて見られるところがいいとおっしゃっていましたが、子どもたちを急き立てるように教育をしなくていいという点が両校に共通している特徴だと思います。それは今の日本において非常に貴重な実践だと思っています。探究には本当にさまざまな形があって、確かに限られた時間の中で教科と総合でせめぎ合っているし、また教科の中でも探究とそうでないいわゆる知識を教える授業があると思いますが、私はやはり探究には時間をかける価値があると思っています。

繰り返しになりますが、教科の場合は教師が探究するに値する問いを設定することが非常に重要です。私が現在入っている学校で、中学3年生に「ハムレット」の「To be, or not to be, that is the question.」とい

う有名なセリフを生徒に投げかけ、子どもたちにどんな訳ができるかを考えさせると、本当にいろいろな回答が出てきて、原文に当たってみるような生徒もいました。そういう面白い問いを立てると、結構食い付いてきてくれる子もいるのです。そうでない子、「早く受験に役立つ知識を教えて」という子もいますが、そこは両校とも中学から選んで入ってくるので、確かに入学者バイアスはあるかもしれませんが、学校を選べるというのはいいところではないかと思っています。

(上野) 実はCASEERのシンポジウムは今まで内部の先生方で構成されていて、初めて外部の先生にご登壇いただき、コメントを頂いているわけですが、本当に勉強になることばかりで、むしろ私が発表資料を作っていたときも、松下先生からは多くの示唆に富むご質問をいただきました。内部だからこそ分かっていて部分と分かっていない部分がすごくあって、改めて研究者の視点から探究的な学びの価値・意義を考えさせられる機会になりました。特に松下先生からは「やらされ探究」という話がありましたけれども、今後探究学習を考えていく上でのカリキュラム設計や対応についてもいろいろ考えていく必要があるだろうと思っています。

オンラインの方からは、先ほどお話しした入学者バイアスの話と、私のネットワーク図の中で、探究性と協働性は割と関係があるが、市民性との関連は結構薄いのではないかという話がありました。今の先生方の話を聞いていると、今回の対象者は中学1年生と高校1年生だけですが、東大附属の場合は全学年取っているので分析は可能です。ここで全学年挙げても自由の森学園との比較はできないので限定しているわけですが、どうも1学年だけでは見られない効果であり、それぞれの学年を横断的に見てもきっと形が変わってくると思うのです。中1、高1でネットワークの形が違ったというのも、これが東大附属の場合だったら、卒業研究に向かうにつれて恐らく市民性のように関連してくる要素が見えてくる

のではないかと思っています。ですので、引き続きいろいろな学年を通して分析していきたいと思っています。

それでは、フロアの皆さまからもぜひいろいろな質問を頂ければと思います。

(質問者 1) 東大附属の生徒の一保護者です。松下先生のお話にあった「探究公害」という言葉がとても胸に刺さりました。わが子も小学生のとき、町の長老たちに昔のオリンピックの話をいろいろ聞いたことをきっかけに、何かあると自分より年上の人から話を聞けばいいということが刷り込まれていて、半径 2km 研究のときにも中野区役所の方に相談しに行ったり、今回の卒研でも地元のお年寄りに話を聞いたり、さんざん区役所にも行ったりしています。でも、それは受ける側からすれば自分の仕事の手を止めることになるし、全ての子たちがこれを行っているのかと思うと、受ける側も大変だと思います。恐らく私の子は図に乗っているのです、大学生になってもいろいろな人に話を聞き続けると思うのですが、それはどうなのかなと思ったので、忌憚のないご意見を伺いたいです。

(松下) 私のところにもインタビューや訪問などいろいろな依頼があるのですが、聞かれている相手にもよると思います。お年寄りに聞くというのは、恐らくお年寄りからすればうれしいのではないかと思います。ただ、自治体の方や大学の研究者などは自分の仕事もあるので、同時にやるのはなかなか大変なこともあります。まず最低限やってほしいことは、自分でできる範囲でいろいろ調べておくことです。今は大学の研究内容も自治体の取り組みもウェブサイトで情報公開するのが当たり前で、かなりのことが分かります。それを調べた上で、どうしてもここが分からないというところに絞って聞くと、だいぶ違うのではないかと思います。自治体は自分たちの仕事を市民に知ってもらうことも重要だと思いますし、大学にもそういう面があるので、ちょっと

なら大丈夫です。

(質問者 2) 私が聞きたいのは、生徒の出した探究の答えに対する教員の関わり方についてです。私は東大附属の公開研に毎回参加するようにしていますが、今年の生徒からの意見の中に、「自分たちが出した答えに対して、正しい答えがどういうものか分からないのは困る」という意見がありました。例えば、先ほど松下先生が例として挙げられた「ハムレット」は、英語教員の立場から見てこの訳は語学的にちょっと良くないのではないかとということがあると思いますし、他の分野でも学問的な立場からこれはちょっとというものがあつたときに、先生がその答えにどのように関わるかという点についてお聞かせいただければと思います。

(對比地) 探究ですごく大事だと思うのはネガティブケイパビリティといわれるもので、正しいか正しくないかは分からないけれども、自分でこれを決めるという力なのだと思います。なぜそう思うのかを聞いていって、その子が納得するかしらないかというところに持っていくことが大事なのではないかと思っています。その前提としては、教員自身が面白がるのが大切だと思います。

(上野) 先行研究の中でも教員の関わり方については本当にさまざまな議論があり、いろいろな分析結果が出ています。ガイダンスなしで進めていく探究学習もありますし、手取り足取り教える探究学習もあると思います。いろいろな結果が出ている中で、こうした議論ができることは本当に素晴らしいと思っています。

宇都宮先生、自由の森学園でも問いに対する支援のようなことはされているのでしょうか。というのも今回の調査で、自由の森学園では「問題意識の明確化」が市民性に関連があつたのです。ここがすごくはっきり見えているところがあつて、ある意味自由の森学園の評価というところも軸があるのですが、

もしかしたら教員の関わり方にも影響があるのではないかと思うので、もし良ければ教えてください。

(宇都宮) ある問いに対して生徒が向き合う、迫っていくところに、大人も共に考えていくというスタンスが、自由の森の中での教員の関わり方として一つあると思います。「君たちで頑張りなさい」という面もありつつ、探究の作り手の一人でもあるという意識はあると思います。市民性に関しては、やはり自由の森が持つ余白のようなものから、課外活動でのいろいろなものとの関わりが市民性とかなり関わりがあるのではないかと、松下先生のお話を聞いて改めて思ったところです。

(松下) 問いに対して答えがないようなものというのは、例えば国語であればいろいろな解釈ができますが、何でもありかというところでもありません。この解釈は無理があるという判断はある程度できると思います。その上で複数の解釈が成り立つのです。

この問いはなかなか答えが出ない問いなのか、それとも複数の答えが許される問いなのか。それから数学であれば答えは一つなのですが、アプローチはいろいろあります。それは教科によっても、あるいは総合においても立てた問いによって違うので、そのあたりの感覚を身に付けられると非常に意味があると思います。

(質問者 3) 公立中学校の現場の実感としては、教科がどんどん探究的な学びにシフトしてきて、私が受け持っている中学1年生の国語や理科、それから私が担当する社会科でも、いわゆる自由進度学習のようなものを取り入れ、学習の課題も、順序も、内容も、ペースも、学習資料も、ほぼ生徒に委ねている状態です。両校では教科と総合を分けているように感じたのですが、その部分の重なり合いというか、教科が探究に寄ってきているということはあるのでしょうか。

(上野) まず研究者の視点からですが、実は東大附属は2-2-2で、総合学習のそれぞれのカリキュラムが違うというのが中核だったので、それをメインにこれまで調査していたのですが、実際のところ想定通りのきれいな結果が出ませんでした。というのも、東大附属の先生や生徒に聞いていくと、教科の中での探究をすごく軸にしている、むしろ総合学習よりも教科学習の方が時間数としては非常に多い中、いわゆる相互作用をしていくことで見えてくるのではないかということで、東大附属では2022年度から教科学習の項目も取り始めて、全部で10項目になっているのです。そうすると面白いのが、総合学習より教科学習の方が効いている部分もあるという調査結果が出てくる点です。具体的にそのあたりについて、東大附属の対比地先生、お話できる範囲でぜひ忌憚なくお願いします。

(対比地) かなり狭い視野でしか見ていませんが、本校の先生方は基本的に教科学習を探究的な問いで進めているように思います。数学の授業では基本をやって、演習問題をやって、この問題はこういうふうに解くのだなというふうに、いわば数をこなすことによって見えてくる部分があります。そういう教育の仕方もあると思います。

しかし、本校の先生は一つの問いで1時間、下手をすると2時間かけてしまうと思います。ただ、その中にいろいろな要素が入ってくるので、結局2時間分の内容としては、もしかしたら普通にやるよりも余りが出るくらいという形で、先生方のスタンスとしては、そもそも探究的な問いによって教科の授業を進めていくという感じなのではないかと私は思っています。

もちろんそうでない部分もあると思います。例えば英単語は取りあえず覚えるしかないもので、そこは切り分けていると思いますが、そういう形で、これはどうしたら面白くなるか、どうやって味わったらいいかというところは、先生方は教科のプロですし、この教材、あるいはこの文章、あるいはこの事象の

何が面白いのか、どこから切ったら見栄えがいいのかというところにすごく長けていますので、探究しようと思っているというよりは、学習とはこんなものではないかというスタンスが探究になってしまっているのではないかと思います。

(松下) 今おっしゃった例は自由進度学習のお話だと思いますが、私は自由進度学習は探究なのだろうかという疑問に思っています。何を子どもに選択させるのかというところはすごく重要だと思うのです。自森は非常に選択講座が多いとのことでしたが、選択講座の中では何でも自由進度にしているわけではないでしょう。繰り返しになって申し訳ないのですが、私は考えるに値する問いを教師が与えることは重要だと思っていて、教科の探究はそうであるべきだと思っています。

また別の例で、中3の化学で電池を作る授業があったのですが、それはこれまでに学んだ金属の性質や電解液の性質などの知識を統合しないと、答えが出せないような問いでした。班学習でもいろいろな電池、金属の組み合わせが出てきましたが、それはこれまで学んだ知識を組み合わせることで取り組むことが求められるような教科の探究なのです。

自由進度学習にすると、子どもが骨のある問い、価値のある問いに出会う可能性が低くなるのではないかと思います。結局、それまでの家庭の教育力など、持っているものを前提にして自由進度学習が行われてしまうのではないかと。教育学者の中でもいろいろな考え方はあると思いますが、私はそういう意味で教科の探究は自由進度学習ではないと思っています。

(宇都宮) 教科の学習で例えば授業を見る機会があったときに、いろいろな角度から深まりを見せる問いというのは、教員から提示された問いに対して、ある生徒は自分の知識からその問いに迫ったり、ある生徒は自分の経験や体験から迫ったり、ある生徒は誰かから聞いた話や本で読んだことから迫るよう

な、知識を持っている人がそこに近づけて、そうでない人はお手上げということにならない問いだと思います。そうした問いを前にしたときに、いわゆる学力が高い生徒が、ある生徒の「あのときこういうことを体験した」「これとちょっとよく似たところがあると思う」という意見にはっとする瞬間があって、それによって探究が深まっていく瞬間を目にすることがあります。その点では、自由進度ではなくて、ある一つの問いをみんなで考える、一つのものに向かっていくということも成り立つのではないかと思います。

(對比地) 恐らく協働と探究はセットでないと成り立たないと思います。松下先生のお話にもあったように、協働があるから自分の知らない世界を知って、その問いの意味を理解できる面があると思うのです。探究でそれぞれがとが^{とが}るから、他の人が協働したときにその恩恵を受けられるし、協働で他の人と会えるから自分がさらにとが^{とが}れるところがあると思います。自由進度学習と探究が結び付かないというのは、個別最適というよりも個別化に走っているのではないかと思います。

(上野) まだまだ議論は尽きませんし、改めて本当に深い学びになっているなど感じています。本共同の調査結果だけでもこれだけ多様な議論ができるわけで、やはり調査をして一度かたちにしてみること、いろいろな目で、いろいろな角度から見えてくるものがあります。CASEERとしても、今後こうした取り組みをさらに積み重ねていきたいと思っています。

まだまだ話し足りない、もっと質問したいことがあるかもしれませんが、時間がかかなり超過しているので本田先生が非常にひやひやしています。これだけ熱弁されてしまうと私も止めるに止められない状況ですが、一応これで議論を閉じたいと思います。

(本田) 先ほど松下先生から、急き立てられるの

は良くないというお話があつて、タイプもぶつちぎるしかないという気持ちでいます。でも、すごく面白いお話だったと思うのです。私も時間があれば何か言いたかったですし、もっともっと質問をお受けしたい第I部になったと思います。

第Ⅱ部 探究的な学びは今、どう生きているか

【座談会】卒業生と語る探究の時間

羽田野 湧太(東京大学教育学部附属中等教育学校・2017年度卒業生)

村松 波(東京大学教育学部附属中等教育学校・2017年度卒業生)

板垣 藍(自由の森学園高等学校・2015年度卒業生)

國増 紗世(自由の森学園高等学校・2017年度卒業生)

コーディネーター：

本田 由紀(CASEER センター長・東京大学教育学研究科教授)

松下 佳代(京都大学教育学研究科教授)

(本田) これから第Ⅱ部を始めたいと思います。第Ⅰ部で非常に印象に残っていることにごく簡単に触れますと、浅川先生にご説明いただいた両校のカリキュラムはかなり異なっているように見えます。自由の森では、極めて多様な選択科目が設けられていたり、全ての評価を記述式で行うようなカリキュラムによって「観」の教育が行われたりしています。また、自分で選びながら自分自身をつくっていくようなアラカルトスタイルの教育が行われているとのことでした。一方、東大附属では2年・2年・2年で区切られており、最後の2年の卒業研究に向けて生徒の自主性を育てます。また第Ⅰ部の議論であったのは、東大附属では卒業研究に向けて収れんしていくようなカリキュラムがあるのに対し、自由の森は選択科目によって拡散していく、新しい世界と出会うカリキュラムになっており、かなり異なっているように見えます。しかし面白いのは、上野先生の資料にあったように、両校はそっくりだという結果がネットワーク分析によって出てきているのです。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部の発表やデータの検証から透かし見えてきた両校の様子をどっぷり経験し、今は卒業して社会人になっていらっしゃる4名の方にご参加いただき、何が起こっていたのかということを生みの声を基により深く掘り下げていきたいと思いま

す。

まず4名の方々のご紹介から始めたいと思います。

(羽田野) 私は8年前に東大附属を卒業し、その後の受験は推薦入試で、国立電気通信大学に進みました。そこで情報数理を学んだ後、今はJR 東日本に勤めています。線路のゆがみの可視化や、内製開発の部署にいるので生成 AI による業務改善などに取り組んでいます。

定期的に卒業生にアンケートが送られてきて、追跡調査に答えているのですが、第Ⅰ部の内容を聴いて、こうしてデータが分析されているのだということが分かって、いい経験になりました。よろしくお願いたします。

(村松) 私も羽田野君と同じ年度に東大附属を卒業しました。大学では工学部の数理工学科に所属し主に数学と物理を学んでいました。また大学卒業後に就職した勤務先では、建設業の会社向けに営業・工事・会計の三つの領域を全てカバーする基幹システムを作っていて、お客様とどのようなシステムを作っていくかやりとりをするのが現在の私の業務です。

羽田野君と同じく私も、在学当時いろいろなアンケートがありましたし、アクティブラーニングなどいろいろな学習方法をしていたので、卒業後もいろいろなアンケートに答えているのですが、アンケートがこのようにして活用されているということが分かって面白かったです。また先ほどの白熱した議論を聞いて、教師の方々はいろいろな考えの下で教えてくださっているということが分かりました。本日はよろしくお願いたします。

(板垣) 私は2015年度に自由の森学園高校を卒業しました。その後は保育の専門学校に行き、学童などいろいろ経験して、4年ほど前から縁があって自由の森の寮に勤務しています。今日は自由の森の良いところを広めて、宣伝活動というよりも卒業生と

して正直な気持ちで参加し、何より対話することを
楽しみたいと思っています。

第Ⅰ部の感想としては、正直に言うとなかなか
難しく理解できない部分もあったのですが、主体
的な学びについてなど、自分たちが大人たちから見
守られていた環境というのは、当たり前だったけれ
どもありがたい環境だったのだということをとても
実感しました。

(國増) 私は自由の森を2017年度に卒業しました。
大学生の頃からスナックで6年間働いていたのです
が、スナックにはいろいろな悩みを抱えたお客さま
がいらっしゃる中で、福祉を学びたいと思うよう
になり、産業カウンセラーの資格を取りました。その
後は立正大学のボランティアセンターで働き、スナ
ックにも勤めながら、社会福祉士の資格を取りなが
らという生活を続けて、今はスナックを辞めて、立
正大学ボランティアセンターでボランティア企画を
立てたり、学生の人生相談に乗ったり、一緒にゲー
ムをしたり、家庭内の悩みを聞いたり、何でも屋の
ような仕事をしています。

第Ⅰ部の感想としては、事前に Google フォームに
探究的な学びを自分で感じた瞬間をつづったので
すが、私の解釈で合っていたか不安になったというの
がシンプルな感想です。よろしくをお願いします。

(本田) 松下先生は第Ⅰ部でもご活躍いただきま
したけれども、第Ⅱ部でも壇上に引っ張り上げてし
まいました。随時ご質問を投げかけていただければ
と思います。

事前に Slide 1 にあるような四つの問いを考えてみ
ました。高校での探究学習で自分が変わったかもし
れないと思っていることがあれば教えてくださいとい
うこと、学校での先生との関係、関わり方、やり
とりなどについて、ご記憶のことがあれば教えてく
ださいということ、そして皆さまは大学など何らか
の学校に進学されているので、高校時代の学びと進
学した後の学びとの関係について、連続性もあれば

ギャップもあったと思いますので、それを教えてく
ださいということ、さらに今、お仕事をそれぞれさ
れているので、これはもしかしたらあの頃のことが
今につながっているかもしれないということをお教
えていただければと思って四つの質問を考えまし
た。でも、今見るとあまり面白くないかもしれない
と思いはじめています。

うかがいたいこと

- 特に高校の頃の探究学習で、「自分が変わった」と思う経験があれば具体的に教えてください。
- 高校の先生との関係について、印象に残っていることがあれば教えてください。
- 高校と大学間に共通性あるいはギャップを感じましたか。
- 今お仕事をする中で、「高校の頃の経験が影響しているな」と思うことがあれば教えてください。

Slide 1

そこで、私が取り回してよいのいいことに、す
ごく乱暴な投げかけ方をしてみます。先ほど四つの
質問を申し上げましたけれども、その四つの中で
これだったら答えてもいいというもの、気になっ
ているものがあればお願いします。

それと、今回はせっかく別々の高校時代を経験
した4人の方が壇上に上がってくださっています。
普通は自分の経験した高校のことしか知らないはず
ですが、今日はいろいろな分析を聞かれて、そんな
学校があるのか!と思ったかもしれません。もし
かしらもう一方の学校に対して、これはどうして
いるのかというふうに皆さんの間でお互いに聞い
てみたいこともあると思います。

今日は一応質問を考えてきましたが、フリー
ディスカッションという形で、「データ分析がな
っていない」「何も捉えていない」という意見
でも構わないので、何か言っていただきたいと思
います。いかがでしょうか。

(羽田野) 教科学習や学校のカリキュラムとし
ての総合学習の時間ではないのですが、課外学
習として高校1年生のときに、数学の先生から
ある日突然肩を叩かれて、「こういうの興味
ない? やってみな

い？」と言われたのです。何の誘いかというと、隣にいる村松さんを含む5人組で、野球のデータを解析してコンペに出てみないかというものでした。僕は中学1年生のときから計算機科学部というプログラミングをする部活に入っていて、Wii リモコンを使った射的などのゲームをプログラミングで作っていたのですが、そのときに初めてプログラミングをゲーム作りではなくデータ分析やシミュレーションに使ったのです。部活でやっていたことをいろいろな分野と結び付けられることが分かって、そこが非常に大きなターニングポイントだったと思っています。

そこから毎年コンテストやコンペに応募するようになり、翌年には鉄道ダイヤのシミュレーションにも取り組みました。元々鉄道オタクだったこともあって、好きなものと好きなものを掛け合わせるとこんなに楽しいのだと感じました。探究を極める環境が非常にオタクに優しい環境だなと思ったのですが、そこが今の自分につながるというのはすごく大きな経験でした。あのときはすごく楽しい分析を、夜何時まで残ってやっていたのでしょうか。一緒にやってくれて、ありがとうございました。

(村松) 羽田野君のお話に関連してなのですが、私も1番目の疑問について考えていました。探究的学習を通して変わったというよりは、私は本を読むことが好きなこともあり、元々性格的にいろいろな資料を読み込んだり、文章を書いたりするのがとても好きなタイプなので、東大附属での総合学習や探究的な学びはその部分を生かしてくれる、重視している部分が大きいと思っています。自分の好きなものを使っていろいろなことができるということを教えてもらったと感じているので、羽田野君が言ったことと共通はするのですが、自分の好きなことを伸ばしてもらえ環境だったというところがあると思います。変わったというよりも自分の好きなことを突き詰められる環境にいさせてもらったので、結果的にそこを伸ばすことができたのではないかと思います。

ています。

先ほど羽田野君が言ってくれた分析のコンペも、データに触れるところがすごく面白くて、私はシミュレーションのことは当時あまり分からなかったのですが、文章を読み込んだり、文章を作成したり、データをいじくりまわして、ここをこうしたらどうなるのだろうというのを考える過程がとても楽しかったです。先生のお誘いがなければそういうことをやろうとも思わなかったの、そこを伸ばしていただいたのはうれしく思っています。

(板垣) 先生との関係性について印象に残っていることとしては、私は小学1年生から中学3年生まで不登校だったのですが、勉強したくてとか、授業が楽しくて自由の森に入ったというよりは、寮があるので、自然に囲まれた学校敷地内の寮に入れてしまえば逃げられないだろうという感じで入れられたのです。ですので、学校というものに当時期待は全くしていなくて、授業も前のめりに関わっていなかったというか、問いに対してちゃんと答えられていた自信は全くないし、優等生ではなかったと思います。でも、僕がいた寮の寮母さんとか、大人の皆さんが目線を合わせて等身大の大人でいてくれて、大人っぽくない関わり方を常にしてくれたので、人と向き合うことに対する恐怖心が弱まり、人を通して学んでいく楽しさを知ることができたと思っています。

いつの間にか学ぶことが楽しくなっていった、それは授業の中なのか、評価表の成果なのかは分かりませんが、当時から読み書きができない僕に、10年前なので今のように個別支援という言葉も飛び交っていない中でワープロをくれる先生がいたり、僕のことをちゃんと一人の人として尊重してくれたので、僕自身も子どもに関わる中でその点は大切にしています。

(國増) 私は1番と2番の間に関連するのですが、小中学生のときに学校が大嫌い、校長先生の話にはどういう意図があるのかをすごく真剣に考えながら聴いてみたのですが、全く中身がないことに気付いたし、先生同士の権力争いが丸見えの公立校で育ったので本当に学校が嫌いでした。それこそ菅間さんがよく知っていると思うのですが、私は小中学校で自分の言葉を奪われたとずっと感じていたのです。というのも、自分が本当に思っていること、考えていることを書いても評価されなくて、評価されないなら書く意味がないと思うようになってしまったのです。本当に檻の中にずっと入れられているような感覚で、大人が求めてくる正解をひたすら探し、自分の言葉を殺して大人が「これはいいね」と言ってくれるようなものをずっと書いたり話したりし続けていたのがとてもつらく、本当の自分と学校にいるときの自分がずっと乖離しているような感覚でした。

その中で自由の森学園に入り、それこそみんなまで対話する授業や自分の思いや考えを自由に書いていいという授業を受けたのですが、1年生のときはそれでも書けないし、話せないし、手も挙げられませんでした。自分を開示するのがすごく怖かったのですが、それをものすごく支えてくださったのが先生方でした。

資料を読んで自分の感想を書く授業があるのですが、中学校から自由の森学園に在籍している子たちの文章を読んだときに、こんなに自由に自分の思っていることを書いてもいいのかものすごく驚いたと同時に、「ここまで？」みたいに若干引いたような感覚になりました。こんなに自由にやっけていいのだとすごく思ったのですが、それを見ても自分は書けませんでした。「書いていいんだよ。評価されないといけないから書くものじゃないよ」と先生方が何度も何度も言ってくださって、高校2年生ぐらいでようやく自分の頭の中にあることを表に出せるようになったと思います。

(本田) 少し泣きそうな状態になっているのですが、それぞれ1番目、2番目の間に絡めて高校時代のご経験を話してくださり、本当にありがとうございます。4人の方々のそれぞれの発言を聞いて、再びふわっとした投げかけをしようとしているのですが、松下先生、もっと聞いてみたいことはありませんか。

(松下) 個別的なことでもいいですか。自森のお二人に伺いますが、板垣さんはかつて不登校で、國増さんは学校に対して期待していなかったわけですが、それでも自森に入ってみようと思ったのはなぜですか。先ほど寮に入れておけば大丈夫だろうというお話がありましたが、寮がある学校は他にもたくさんあります。二人とも学校に対する希望はまだ失っていなかったのでしょうか。

(板垣) 僕は学校には行っていませんでしたが、当時の僕はある意味で時代の最先端の不登校だったのです。今のように不登校の人がたくさんいるわけではなく、学校に行くのが当たり前という中で不登校だったのですが、学校に行けないことに強いコンプレックスも感じていて、学校という場所に対する憧れはありましたが、学校に行ってもついていけないとか、教室で落ち着いて座って話を聞いていてもふわっと流れてしまうのであまり意味がないと思っていたのです。

それこそ漢字に関しても、インターネットがはやり始めた頃だったので、覚えなくてもネットで探せばいいだろうと思ったりして、学校に行く意味はあまり見いだせなかったのですが、学校には行きたいという気持ちはあって、でもどうしてもできないという中で、姉から自由の森を紹介され、「藍みたいに学校に行っていない人もすごく楽しんでいるよ。勉強もしないし、テストもないよ」と言われたときに、自分が今まで比較されてきたこと以外のことで見られる学校はワクワクすると思ひ、そこならいいかもという気持ちで入りました。

(國増) 私は母の友人から「紗世ちゃんに絶対に合う学校があるよ」と紹介されて、「取りあえず見に行ってきたらよ」と言われてオープンキャンパスか何かに行ったのがきっかけでした。学校に対する期待は、「大人って何なの？」みたいな気持ちがあったので恐らく失ってはいたのです。私は小学校の頃から宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』が大好きで、それを読書感想文で本当に自分が書きたいように書いて提出したことがあります。もちろん何の賞ももらえなかったのですが、そういうことをやってみいたいという気持ちがどこかにずっとあったのだろうと思います。オープンキャンパスに行ったときに、ここならできるかもという期待がもしかしたら自分のどこかにあったかもしれません。でも決め手になったのは、オープンキャンパスが終わってから手書きの手紙が自由の森の先生から届いたことで、絶対ここに行きたいと思って決めました。

(松下) 先ほども板垣さんが「一人の人として尊重してくれる」とおっしゃっていましたが、今の話もそうですね。「菅間さん」という呼び方をされていましたが、自森は生徒と教師の関係の土台に人と人の関係があるということがお二人の話から非常によく分かりました。

(本田) カリキュラムとか、探究学習とか、方針とか、データ分析の話等を第Ⅰ部ではしてきましたが、恐らく話の中心はそこではないかもしれなくて、底に流れている前提というか、哲学というか、基本の基本のようなところが、学校内に独特な空気として存在しているのではないかと感じました。

東附も東附で、ぼんと肩をたたかれて「やってみない？」と言われるのも、それはそれで面白い関係性です。もしかしたらお二人がお話くださった目線を合わせてという話と同じ面もあるかもしれません。教員と生徒、あるいは生徒同士でもいいのですが、人と人との関わりについて東附のお二人にもお話しいただきたいと思います。

(村松) 東附での先生との関わりは、探究学習と教科学習で異なっていて、教科学習では浅川先生のお話にもあったとおり、授業のときは正面を向かず横を向いて行きます。中学1年生のときは、なぜそうするのだろうと思っていたのですが、やり始めると「なるほど」と思い始めました。

ほぼ板書をしない授業が結構あって、先生が「この数式について考えよう」と言い始めると、みんなでその数式がなぜこの計算結果になるのかを考え始めるのです。1問について40人で会話をし、中学1年生の数学の最初の授業が終わってしまったので、これで本当にカリキュラムどおりに全部終わるのか分からなくなりましたが、その時間が1週間は続きました。でも、その考え方を知るのは結構重要で、1週間の終わりぐらいに「これでもうこの計算のやり方は分かったでしょう」となって、そこから別の問題が始まるのですが、1問目をちゃんと理解したからこうやればいいのかというのが分かって、1問目にすごく時間をかけたことに意味があったのだと思ったので、中学1年生のときの最初の授業は非常に衝撃的でした。

数学以外のいろいろな先生にもお会いして授業を受けるのですが、個性的な先生がいろいろなアプローチで授業をされていました。社会科の授業では、教科書をほぼ見ずにずっと動画を見て、重要なところをプリントに埋めながら、これがリアルな生の声で社会はこうやって動いているのだというのを勉強していきました。教科書を使わない授業を初めて受けて、先生方のスキルがすごく高いからできることかもしれませんが、いろいろな先生とお会いして面白い話を聴くのがすごく楽しかった記憶があります。

(羽田野) 今の話に私も共感するのですが、一つ共感できなかったところが、数学で同じ問題をやり続けるというのは確かに何度もあって、結局この年にやらなければいけないことが最後まで終わらなかったことも意外とあったように思います。そこは置いておいて、その副作用なのか何なのか、卒業後に

自分は他の人と比べて集中力が短いかもしれないと思うことがありました。今日のシンポジウムの第I部でもずっと座っているのがつらくなってきたのですが、大学に入ると小学校で受けていたような一般的な授業を受けていて、しかも90分座りっ放しでひたすら先生の板書を取るという授業だったのでかなり耐えられず、3番目の質問にあるように高校と大学ですごく大きなギャップを感じました。

自由の森のお二人もそうではないかと思ってお聞きしたいのですが、今も仕事をしている中で自分は集中力が足りないと思うと同時に、アクティブラーニングで行っていたような協調的な学びや協働性、ちゃんと自分の意見を持って話せるというところにはすごくつながっています。

本校の先生たちに多様性があふれていたのはもちろんですが、生徒もすごく個性的な人が多かったと思います。多様性のある中で班ワークなどをひたすら行い、頑張って1問について考えて結論を出すというのは今の仕事にもすごく生きていると思っています。自己紹介でお話しした線路のゆがみの可視化に関しても、それこそ自分は線路のことなど全く分からないIT職ですが、現場で線路のメンテナンスをずっとしている方にも一緒に入っていただいて協働しているので、そこではすごく経験が生きたと感じます。最近のシステム界限ではアジャイル開発というのですが、最初に要件を一気に決めるのではなく、最低限の範囲で使えるものを作った上で、それを先に社会に当ててみて検証し、それを良くするという開発を行っていて、そうした取り組みにまさに生きているなと思っています。ただ、大学ときはギャップが大きくて、必修と選択必修で12単位落としてしまったのですが、ぎりぎり最低限のラインで何とか卒業できました。そこは苦しみました。

(本田) 先生との関係性についてお話しくさるとともに、それが卒業後とのギャップもあつたりというところまで展開してくださって、ありがとうございます。

2校はやり方が違えども非常に独特なやり方で、一斉授業のような形ではない、旧式の学力ではない形で生徒と向き合いながら教育をしていると思うのですが、この独特さはそれ以外の日本社会や進学先との間で、良い面もあれば、あれっと思うようなこともあつたという話がありました。でも、さらにその後の社会まで視線を伸ばせば、学校でわちゃわちゃと話し合いながらやっていたことが、実は仕事の中でやっていることと結構同じだったことに気が付いたり、フェーズによっても、大学のときにはなじまなかったけれどもその後になって結構いいということに気が付いたり、一気に活用するところまで発展するのではなく、その後どこの場にいるかによっても生きたり生きなかつたりということがあつたと思います。

自森のお二人に伺いたいのですが、高校時代のご経験が卒業後の進学先や今のお仕事においてどんなポジティブ・ネガティブな表れ方をしているのでしょうか。

(板垣) 僕の中では、探究学習を経てなのかどうか分かりませんが、それこそ自分から探究していくことが今でも生きている一番大きいことなのではないかと思っています。自分の仕事に対して情熱を持ち、そこに満足するのではなくて、もっと良くしていきたいとか、相手が生徒なので生徒にもっと良くなってほしいとか、逆に自分がこうしたらもっと良くなるのではないかということを常に自分に対して問い続けることが当たり前になっていると思います。

でも逆に、周りとの熱量というか、自由の森は教員だけではなくて友達だったり、イベントや行事があつて、いろいろなことを含めて自由の森ができていて、その環境にいるから自分が前のめりにいろいろなことに挑戦してみようと思える環境になっているのではないかと思うのですが、社会に出てから、大学に進んでからは、周りの子たちが割と消極的というか、ノルマであるテストの点数をクリアすればいいと考えたり、仕事のノルマでここまでやってお

けばいいというふうに、割と妥協したラインのようなものを見ているので、周りの人とのギャップで自分もその方向に引っ張られてしまいますし、ここで引っ張られては駄目だろうと自分で自分を責める状況になったり、そういう苦しさのようなものは卒業後今でもずっと感じています。自森で働き始めてからはあまりありませんが、そういうことを何となく感じる時はあります。

(國増) 先ほど副作用の話があったのですが、まさしく大学1年生のときにものすごく病んでしまったのです。というのも、私は菅間さんが担任のクラスだったのですが、菅間さんとは大げんかして1カ月口を利かなかったり、本当に対等に接して下さっていたのですがぐい合いになったりしましたし、友達に関しても先輩・後輩という概念が自森には割となかったのですが、大学生になると先輩・後輩関係が割と厳しく、私のいるべき場所はここではないのではないかと思うとすごくつらくて、卒業アルバムを見ては毎日泣いていました。

その間にコロナ禍になって、オンラインで初めて対等なところに下りてくれる先生と出会ったのです。その先生は、「コロナ禍でみんなが感じていることを何でも送ってきていい」と言ってくれる先生で、そのとき初めてみんなが自分と同じように悩んでいることに気付きました。自分は自由の森から来たからみんなとは違うというふうに自分自身にフィルターをかけていたし、周りの人たちに対してもフィルターをかけて見ていたのです。すごく失礼なことをしていたことにそこで初めて気付いて、みんな同じ人間だということがなぜか抜けていた部分がありました。その先生のゼミはひたすら対話をするゼミで、人間哲学を学んでいたのですが、自分のことを何かから何までひたすら語り合って、それを卒論として形にする作業をしていました。

このように最初はギャップにすごく苦しんだのですが、外に出ても自分と対等なところに下りてくれる人はいるし、自分自身がフィルターをかけて見て

いたということが分かったので、大学に入って改めて、自分は関係性の中でずっと形成され続ける存在なのだとことをすごく実感しました。

(本田) 先ほど浅川先生が言ってくださったように「観」の教育が自森の特徴であり、東附の方は面白いがる、楽しむことを大切にしている、雰囲気の違いが表れているように思いました。

ということで、ちょっと乱暴な問いかけにいろいろお話していただいてきて、最後にまたご苦勞をおかけするのですが、結局のところ自分にとって高校時代とは何だったのか、キャッチフレーズか何かにもまとめて話していただければと思います。

(羽田野) 今の自分にとっての高校時代をキャッチフレーズでまとめると、「今の自分が生まれた場所」というか、高校時代の経験やそこで見つけた興味・関心、そこで出会った人であったり分野を基に、今まさに趣味も仕事も人間関係もすごく充実していると思うので、それを見つけれられたのがよかったと思います。

(村松) 一つの物事を突き詰めて考えることの重要性というか、楽しさを教えてもらった場所になると思います。東大附属でここまで自由に一つのことを突き詰めてやった経験がなかったら、それをこの先やろうと思わなかっただろうと思います。

東大附属の探究学習では半径2km 研究といって、東大附属から半径2km 以内で何でもいいからテーマを自分で探して、突き詰めて考えて答えを出せというものがあります。テーマを何にしたらいいか全然分からないというところから始まるのですが、何時間か授業が進むにつれて、これは面白いかもしれないというものを適当に決めて、なぜこれにしたのかもだんだんよく分からなくなってくるのですが、それに対してずっと何か考えて結果を出すのです。最終的にはこれを突き詰めて考えてよかったと思えるのですが、やっているときは無我夢中で何だか分か

りませんでした。でも、そういう経験は大学でも生きていて、私は数学を専攻していたので、数学の論法についてずっと突き詰めて考えて、先生の言っていることも全然分からないけれども取りあえず同じ学科の同期みんなが集まって考えるということをやっていたので、考えることは大切だということの中高時代に教えてもらったと思っています。

(板垣) キャッチフレーズは「悶絶葛藤地獄」でしょうか。振り返ってみて恥ずかしいというのも込みですし、楽しかった記憶もあります。一番はいろいろなことと常に向き合ったことだと思います。それは対自分であったり、授業や行事、僕は寮に入っていたので生活も含めて向き合い続けたことが、時には苦しいし、常に悩み続けるというか、ほぼ地獄のような時間だったなと思います。それこそ悩んで病む時間も多かったと思うのですが、その時間が今でも完全に僕の宝物という言い方をするとキャッチ一過ぎますけれども、本当にキラキラした青春のような時間だったと思います。

(國増) 羽田野さんと同じで、「私が生まれた場所」ですかね。小中学校までの私は私ではないので。全部が私になったかと言われると分かりませんが、それでも「私が生まれた場所」という感じでしょうか。

苦しいというのは藍君と一緒に、とにかく向き合い続けなくてはいけなかったし、自由の森は自分で頑張らなくてはいけなかったところでもあって、自分で動かないといけなかったのも、自分で自分を律することもそうですし、誰かに寄りかかれるようにするという自立をしなければならぬのがとても大変だったのですが、今でも帰る場所だと思っていますし、私も宝物のように思っています。

(松下) 先ほど本田さんが言われたように、「探究とは？」という問い以上に「教育とは？」「学校とは？」という語りを皆さんから聞けたと思います。

先ほど入学者バイアスという問題が出ていたので

すが、私は入学者バイアスはあるのではないのかと思っています。あの学校に入れたことが今につながっていて、それは人から勧められたのかもしれませんが、やはり自分で選んで入ってきたわけです。そこから始まるわけですから、バイアスだろうが何だろうが、そこから始まるしかないし、それで育ててもらったわけです。

4人の中で、この2校は根っこにあるものがかなり共通していると感じました。先生が生徒と本当に人間として対等に付き合ってくださいしています。先ほどの野球の分析に誘ってくださったという話も、二人のことをよく見ていらっしゃるからこそ、これなら学校外で伸びるのではないかという機会を与えてくださったということですね。先ほど「人に見守られていた」とおっしゃっていましたが、見守られながら成長することができた場所だったのだなと本当に思いました。これは探究以前のもっと深いところにあるものだというのを改めて感じました。

フロアを交えた質疑応答及び話題提供者からの回答
注. 質問者の匿名性を保つため、各質問者に対して質問者 1.2...という番号を付与した

注. チャットでの質問・回答はゴシック体で表記した

(本田) 「主体的・探究的な学び、その可能性とリアル」というテーマを既に超え始めている状況にありますけれども、お許しいただければと思います。

ディスカッションの時間は過ぎようとしています。私のファシリテートでは問うことができていない事柄もいろいろあるので、質疑応答に入りたいと思います。もちろん会場からも募ろうと思いますが、オンラインでも結構お寄せいただいているので、いったんオンラインの質問にお答えしたいと思います。石黒先生がオンラインでの質問をピックアップしてくださっているので、お答えいただきたいと思いません。

(石黒) 恐らく松下先生への質問だと思いますが、「考えるに値しない問いというのは存在するのでしょうか。全ての問いは深めること、価値を見いだすことができるのではないか」という質問が匿名で来ています。

(松下) 考えるに値しない問いはあると思います。すごく簡単に答えられる問い、調べればすぐ分かる問いなど、学校内でみんなで時間をかけて取り組むのに値しない問いはあると思います。

(石黒) 2件目は、「教科学習でも探究的な活動が入っているようですが、今日の生成 AI が起こしている学習活動の変質についてどうお考えでしょうか」という質問です。教員サイドでということだったので、対比地先生と宇都宮先生にお話を伺いたと思います。

(対比地) これは主観ですが、本校の生徒は生成 AI を比較的うまく使えていると思います。中学 1・

2 年生のときから協働的な学びをしていて、自分の知りたいことをちゃんとずらさずに一応聞けるので、もっともらしいことを聞いても分からなければ「分からない」と返すし、「この部分は違うのではないか」と返せるので、比較的使えていると思いますが、一般論でいうと（生成 AI から返ってくるものは）もっともらしく聞こえるので、そのまま「ふーん」というふうに分かった感じになってしまうのではないかと危惧しています。

私が気になっているのはここだよということをやんと言えようになっっていないと厳しいのではないかと思うので、生成 AI は使えばいいと思うのですが、使えるためには人との会話というか、自分のこだわりや引っかかりをちゃんと持ったまま対話できる力や姿勢に慣れていないと難しいように思います。

(宇都宮) 生徒からも生成 AI の話が出ることはありますが、自由の森の教育活動の中で学校から常に問われるのはあなたはどう思うのかということなので、自分の考えをいかに経験と結び付けて語るかという面では AI はまだ入り込んでいないという気はしていますが、逆に教員も新たに問われているのだろうということは大人の中で話していたりします。

(本田) 会場の皆さまから、第I部の登壇者の方へのご質問でも結構ですし、前に並んでいる卒業生の皆さまへの質問でも結構ですけれども、何かご質問がおりの方はお願いします。

(質問者4) 4人の卒業生の方々にお伺いしたいと思います。私の息子は自森に6年間通ったのですが、いろいろなことができる、認められる、自由にできる環境で非常に有意義な6年間だったようです。父親としては、学校の文化祭や合唱祭や体育祭に行けないのがすごく寂しいです。

いろいろな方のお話の中にインプット・アウトプットの話が必ず出てきますし、本当にいろいろなアウトプットがさまざまな場面であって、それを受けて生徒たちもいろいろなインプットをして学びが深まっていくと思っています。皆さんは卒業して8~10年たったところですが、こういったことがあればもっと学びが深まっただろうというものがあれば教えてください。逆にこれは今の高校生の学びには必要ないというものもあればお伺いしたいと思います。

(國増) 難しいですね。自森に限定していえば進路指導でしょうか。どの大学に行くか、就職するかどうかだけでなく、生活している中で自分がどう生きていきたいか、どう豊かに生きていくかを考えられる環境ではあるのですが、3年生で一応節目になるので、それを踏まえて改めて自分がどう生きていきたいかを改めて考えられるような、生き方について考える学びの時間がもっとあった方がいいのではないかと思います。進路で悩んでいた友達が結構多かった印象があって、自由の森では進路指導をもっとしてほしいと常々思っていたので、自分の生き方としての進路をもっと考えられる時間が取れた方がよいのではないかと思います。

(板垣) 要らないものと要るものが割とリンクしていると思うのですが、Wi-Fiは要らないかなと最近

思います。僕も非常にスマホ中毒なのですが、寮で生徒と一緒に暮らしている身として、僕の経験からすると人と向き合わずにいい時間がスマホだったり、先ほどのAIではないですがスマホに答えが全部あったりするわけです。僕はスマホの代わりに鏡を持ってほしいと思うのですが、そういうふうになっただけいいと思いますね。

(村松) 第I部で、東大附属は答えがなくて困るという話があったと思います。東大附属にもちゃんと答えを出す教科学習はあるのですが、教員が一方通行で教えるのではなく、何か問いを出されて、自分で調べて考えて答えを出し、それでいいんじゃないという感じで終わるので、正解をあまりちゃんと言わないというのは確かにあると思います。ただ、それであまり困っていないかもしれないと思っていて、もちろん社会人になったら取らなくてはいけない資格試験がありますし、大学受験も正解ありきで試験の合否が決まるため、社会人になって正解がなくて困る場面はあるといえはるのですが、それはそれとして、正解がないものを考える時間が中高時代にあるのは良いことだと思います。

(羽田野) 一番難しい質問だと思って伺っていました。東大附属のカリキュラムは自分にはすごく合っていたと思うのですが、中学生の頃はそうでもなかったと思っていて、本当に肩をたたかれて変わったなと思います。中学生のときは平均評点も2.67ぐらいだったのですが、高校では4以上に上がったり、自分がこれだというものを見つけられてからすごく充実し始めたと思います。

ただ、それがどうしたら見つかるのか、東大附属に何を増やせば見つかるようになるのかというのは自分には分かりません。同時に、私には東大附属のカリキュラムは合っていたと思いますし、隣の波さんもすごく合っていたと思うのですが、同級生の話を聞くと、そうでない人も結構多かったと思います。教科学習における探究的な学びは比較的多くの人に

はまると思うのですが、主体的な学びでは自分のやりたいテーマを見つけられなくても卒業研究や半径2km 研究は進みますし、締め切りもありますから、それを見つけられないままやると、結構もったいない時間、あまり楽しくない時間になってしまうと思います。

かく言う自分も実は、先生の同意をいったん得ていた卒業研究のテーマを、春休みを経て変えているのです。鉄道系ではないことをやろうとしていたのですが、小さなコンテストがすごく楽しくて、この分野を突き詰めたいと思い、卒業研究を鉄道系に変えました。はまるものを見つけられない状態でやるのはあまり良くない時間の使い方かもしれないと思ったので、僕はすごく運が良かったのだと思います。

(質問者 5) 松下先生にお伺いします。私は自由の森学園の卒業生で、現在息子を東大附属に通わせています。今日なぜ来たのかというと、きっと自分の子どもの時代には自由の森のような探究的な学問が広まっていて、そういう学校の中で育つのだろうと思っていたのです。しかし、長女が公立中学に進学して驚いたのは、長女の受けていた授業が私が中学のときに受けていた授業とそっくりだったことです。すごくがっかりして、なぜまだ公立学校はこんなのだろうと思いました。息子は自分でいろいろ探して東大附属に行くことにしたのですが、どうして東大附属の教育が公立の中高に下りていないのだろうと思って今日は来ました。今日の話聞いていて、やはり6年間という時間が必要なのではないかと思うのですが、公立中学の3年間という区切りの中でも探究的な学びを追求できる術はあるのでしょうか。

(松下) 私はあると思います。私は小・中・高と全て公立の学校に通ってきたのですが、中学校ではほぼ全ての教科が班学習でした。アクティブラーニングが言われ始めたときも、私がもう中学時代にやっていたことだと思ったものです。高校は進学校で、

全く正反対の学校でしたが、中学のときは教科も探究的で、行事も生徒主体でやっていました。その中で学力もすごくついたと思っています。例えば、国語に関しては高校では大して力がつきませんでした。が、中学校のときにつけてもらった学力で大学入試まで行けたと思うぐらいでした。

私は筑豊の一番北にある町の出身で、家庭の事情もさまざまな人がいたのですが、今でも一つ一つの授業が思い出されるぐらい、印象に残る授業を協働で学んでいました。私の中学校時代でもそういうことができていたので、現在それができていないのは、学校を取り巻く状況の変化はもちろんです。私たち教育学者の責任もあるかもしれませんが、そこはもう少し頑張らなくてはいけないと思いますが、可能ではあると思います。

(質問者 6) 自分は東大附属の卒業生で、計算機科学部出身です。今は大学3年生で卒論を書いている段階なのですが、東附の1~2年生ごろからOfficeの使い方など情報リテラシーについてはしっかり身に付けていたつもりです。倫理や哲学の授業では批判的思考力や自己分析をすごくたたき込まれたので、大学でも適応できるだろうし、特別な存在だというふうにおごり高ぶりがある状態で大学に行ったのですが、入ってみたら主体的・探究的な学びがすぐに生きることはまずなくて、Wordはどうやって開くか、Windowsとは何かという段階の人たちがとても多くて驚いたのです。

その段階ではまだ自分が特別な存在という感じで、そんなことも分かっていないのかというふうに思っていたのですが、結果的に授業や講義自体は東附のものとは全く違っていました。自分は心理学を専攻しているのでアクティブラーニングやグループワークを行う先生もいるのですが、ほとんどの場合は座学で、黒板に書いてあることをひたすら覚え、テストを頑張るといような授業が多くて、私はまるで駄目だったのです。ぎりぎりの状態でどう立ち回るかというのは慣れていたつもりなのですが、東大附

属に6年間いて染みついた考え方が抜けず、大学に入ってからギャップでものすごく苦しんだのです。OBの皆さんに聞きたいのですが、大学生時代のスランプというかギャップに対してどう乗り切ったのか、乗り切り方のコツみたいなものを教えていただきたいと思います。

(羽田野) 社会人は楽しいので、頑張りましょう。大学ではコンプレックス克服は最後までできませんでしたが、研究室配属あたりから楽しくなってきたと思います。

(村松) 人に聞きましょう。私は大学で不明点があったら同じ学科の友人に聞きまくっていました。例えば私は当時、講義中に教授のおっしゃっていることの意味が本当に分からないことがありましたが、「テストに出るぞ」と言われて困った時、テストまでに友人や教授聞いて理解すれば何となく大丈夫でした。なので、だれでも良いので周りの人に聞きましょう。

(板垣) 僕は乗り越えていません。というか、自分のことは結構好きになれました。僕は5人きょうだいの末っ子で常に比較されていたので、コンプレックスはたくさんあるのですが、それと同じぐらい自分のことを認めてあげられるようになったと思っています。学んできたことの中に答えがあると思うので、すごく苦しいかもしれないけれどもぜひ向き合い続けてもらえたら、おのずと自分で認められる瞬間が来るのではないかと思います。

(國増) 先ほど言ったとおり、大学1年生のときは高校の卒アルを見ては毎日泣いていたという感じでしたが、ひたすら先生を探しました。いい先生を見つけないかと思って、取っている教科の先生には全員話しかけて、この人は面白いと思ったらご飯まで誘っていました。研究室にも押しかけたりというのをひたすら続けて、魂でぶつかってくるようなすご

い人に結果的に出会い、その方のおかげで乗り越えたので、ひたすら大人に声をかけるのはありだと思います。

(本田) 國増さんのアドバイスがもしかしたら効くかもしれないですね。というわけで、もっと質疑応答したいところですが、さすがに随分延びているので、卒業生の方々とディスカッションはここまでとさせていただきたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

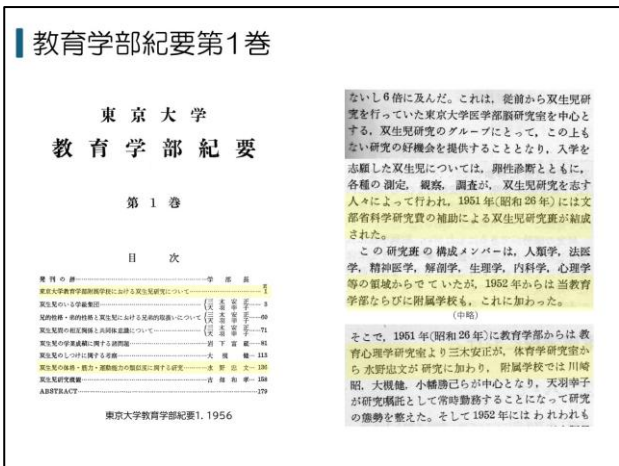
総括

山本 義春（東京大学教育学研究科教授）



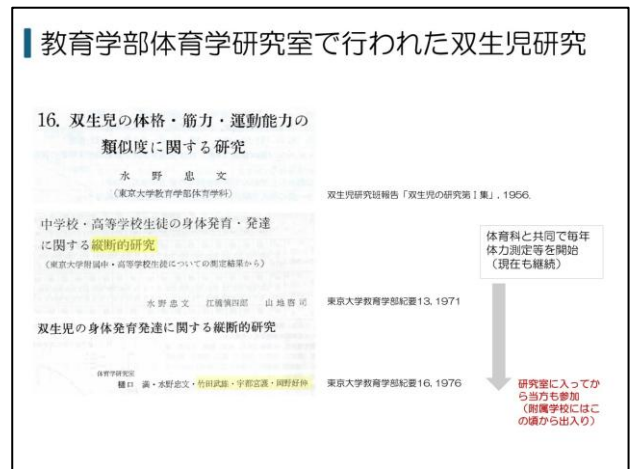
私ごとですけれども、この3月で定年退職いたします。そういったこともあってか、上野先生、本田先生より、本プロジェクトに長年携わった山本にシンポジウムの最後を締めくくる形で登壇をというご依頼を頂きました。本日は効果検証プロジェクトの総括を中心に、本日のシンポジウムの総括を交えてお話ししたいと思います。

教育学部附属学校は1948年の創立であり、双生児研究で有名です。創立以来、本学に双生児研究班というものができる、その後、教育学部の体育学研究室、附属学校の体育科、さらには教育学部全体と附属学校が協力して、双生児研究を進めてきました。教育学部紀要第1巻（1956年）には、双子に関する研究が並んでいます（Slide 1）。



Slide 1

同年に出た「双生児研究班報告」には、「双生児の体格・筋力・運動能力の類似度に関する研究」が掲載されています（Slide 2）。その後、1971年ごろからは身体発育・発達の縦断的研究が行われるようになり、この頃から体育科と共同で体力測定を開始し、現在もずっと続いています。1976年ごろには附属学校の先生方も共同研究者として入ってきています。私がこの研究室に入ったのは1982年ですが、実は附属学校にはその頃から出入りしていました。



Slide 2

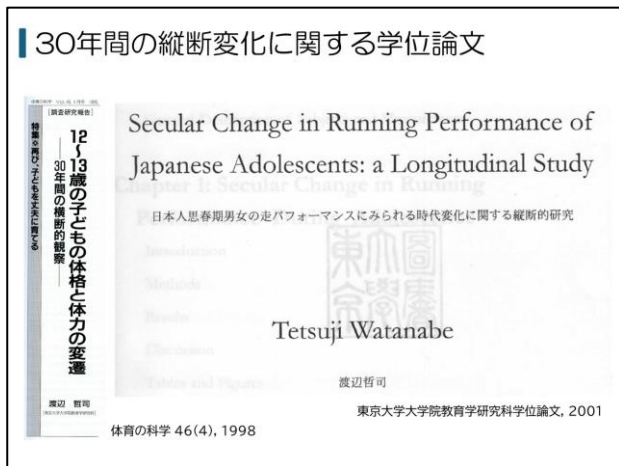
Slide 3は1978年撮影の附属学校の校舎です。海洋研究所は柏に移っていて、今はもうありません。当時は京王線がまだ地上を走っていました。私は附属に1970年代から入っていますから、そろそろ50年ぐらいのお付き合いがあるということになります。



Slide 3

1993年には教育学研究科に赴任し、院生とこれらのデータを分析してみました（Slide 4）。30年も継続

蓄積されると、時代性や社会性も含めたそれなりの価値があるデータになるということで、これを分析しました。このとき苦労したのは、データを使える形にためていくアーカイビングをどうするかということでした。



Slide 4

実は過去50年余り、体育科を含む研究部で多くの調査が継続されてきましたが、全て紙媒体でした。これを使用可能なデータに変えるために、教育学部と大学全体にお願いに行き、予算をもらって使用可能なデータを作りました (Slide 5)。

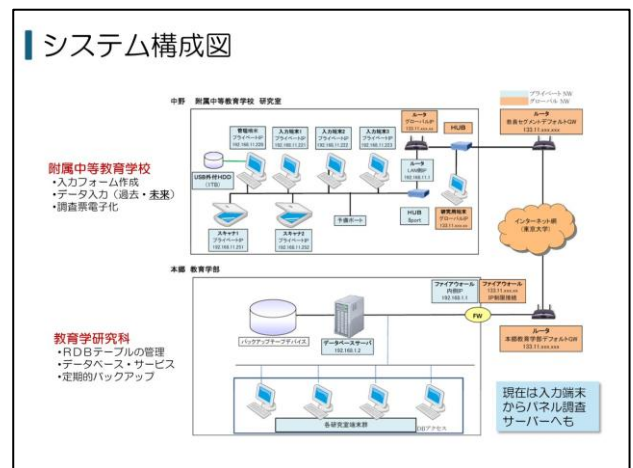


Slide 5

これにはもう一つの意義があって、教育学部には附属学校との50年間の調査・実践の記録が残っていたわけですが、燃えたらおしまいですから、まずこれを保全しなければなりません。これはよく知られていることですが、大正大震災のときに東大の図書館が全焼し、江戸時代からの蔵書がほとんどなくな

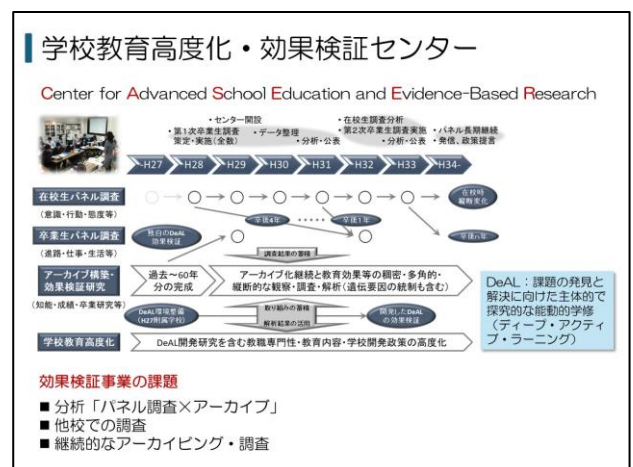
ったこともありました。私たちがアーカイビングに差しかったのは2011年ですから、東日本大震災の1年前で、ぎりぎり間に合いました。

システムとしては、附属学校で入力フォームを作成してデータを入力し、教育学研究科ではデータベースの管理と定期的なバックアップを行うということがフローとして動くものを作りました (Slide 6)。現在はパネルサーバーがあり、他のどの学校からも入ってこられるようになっています。



Slide 6

アーカイビングが進んできたので、平成29年(2017年)、学校教育高度化センターと効果検証部門を一緒にして、学校教育高度化・効果検証センターに改組しました (Slide 7)。



Slide 7

調査自体はその1年前から始まっています。どういう調査かという、本日の話題である探究学習の効果検証をしようというプロジェクトです。そのア

ーカイクには、知能や成績、卒業研究の要旨などが入っています。それから在校生パネル調査として探究学習に対する意識・行動・態度、卒業生のパネル調査として進路・仕事・生活にどう結び付いているかというデータが入っています。

課題はよく認識していて、一つはアーカイブとパネル調査が交差した分析はまだ行われていません。もう一つは、附属のことだけでは駄目なので、他の学校でも調査してみてもどうかということです。

本日のシンポジウムの総括ですけれども、まず一つは上野先生が調査の限界について話されました (Slide 8)。交絡因子・調査項目等が欠如していますが、アーカイブには全部ではありませんがこれに関する情報が結構あるので、そこと併せた分析が必要になります。

■ 本日のシンポジウムの総括 (1)

- 複雑な探究学習の調査の限界 (上野先生) — 交絡因子・調査項目等の欠如 (アーカイブにはある程度揃っている)
- 自由の森学園も含め、調査の広範囲な展開を (松下先生、上野先生) — freewareなので原則運営経費のみで展開可能
- 附属学校と自由の森学園、探究学習のやり方は必ずしも同じではないが、その成果には共通点が見られたとの印象

Slide 8

それから松下先生、上野先生に対しては、自由の森学園も含め、広範囲で調査してみてもどうかと思います。パネルサーバーにポートが空いているので、そこに調査対象者がアクセスしてくれば自動的にたまるようになっていて、そのこと自体にはほとんどお金がかかりません。

もう一つ印象に残ったのは、東附と自森の探究学習の方法は必ずしも同じではないのですが、その成果には結構共通点が見られたということです。

それから協働学習に濃淡があり、私の理解では東附は協働学習が比較的大きく取り上げられているのですが、自森はそうではありません (Slide 9)。これ

によって、「探究性・市民性・協働性」と「広範な意見交換」の関係性が東附では強く、意見交換を通じた探究が行われているということがデータから見えたと思います。自森では逆にそれがマイナスの効果を持っていたのは興味深いところです。

■ 本日のシンポジウムの総括 (2)

- 協働学習の濃淡と「探究性・市民性・協働性」と「広範な意見交換」との関係性の違いは興味深い (松下先生、対比地先生) — 意見交換を通じた探究性
- 本日の座談会の附属学校卒業生は、2016年の第1回、2017年の第2回パネル調査を受けている — その後私たちを取り巻く社会は大きく変化したが、現在までに調査結果がどのように推移したか (個人的には) 興味がある

Slide 9

本日の座談会の附属学校卒業生は、2016年 (第1回)、2017年 (第2回) のパネル調査を受けています。その後、私たちを取り巻く社会はコロナも含めて大きく変化しましたが、現在までに調査結果がどのように推移したか、個人的には非常に興味があります。

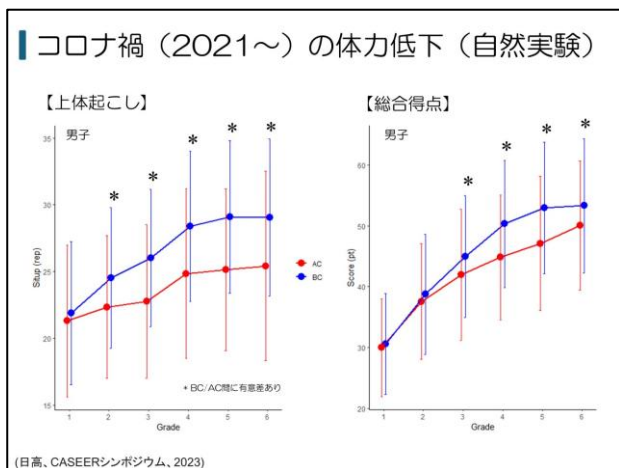
このように本プロジェクトに関わっているうちに、私は学校教育は専門外ですし、さらには50年近く附属と関係しているということも恐らくあまり関係ないのですが、晩年において最も意外だったのは、近年になって学校長を仰せつかったことです (Slide 10)。

■ 附属中等教育学校・校長室にて



Slide 10

任期中はコロナ禍で、校長室の隣に保健室があるのですが、生徒の心身に何か異変があるのではないかとということで、例えばコロナ禍前後の在校生の体力を見てみました (Slide 11)。1年から6年までの総合得点がコロナ後にどれくらい低下したかという、高校生が中学2年生ぐらいまでの体力に低下していることが分かりました。これは、成長期 (特に男子) における活動制限がどれだけ影響を与えるかというものの自然実験のようになっています。



Slide 11

こうしたことができるのは、毎年継続して調査結果をためているからです。校長退任時、保健体育科の先生方に、「授業を工夫して体幹を鍛えるようなものを取り入れてはどうか」とお願いしたのですが、その後どうなっているか、今後調べていかなければなりません。

これからは、個人的には附属学校のアーカイブと効果検証パネル調査結果の統合解析が必要でしょう (Slide 12)。それから、調査サーバーの広範囲な展開も必要だと思います。CASEER としていろいろな学校へサービスを展開することを考えてはどうでしょうか。最後に、アーカイビングと調査の継続です。アーカイビングには多少コストがかかりますし、データの質・広がり・調査項目をどうするかということも賛否あるものの、続けていないとどうなるか分からないので、22世紀までとはいいいませんが、あと10年ぐらいは続けたらどうだろうかと思います。ご清聴ありがとうございました。

これから (私見)

- 附属学校アーカイブと効果検証パネル調査結果との統合解析
- 自由の森学園も含め、調査サーバーの広範囲な展開。CASEERとしてサービス展開を検討してはどうか
- アーカイビング・調査の継続。次の10年に主体的・探究的な学びに起こること、記録したい／見てみたいと思いませんか？

Slide 12

(上野) 山本先生、本当にこの10年間、いろいろとありがとうございました。

閉会の挨拶

本田 由紀 (CASEER センター長・東京大学教育学研究科教授)

します。

非常に長丁場になりましたけれども、自画自賛ではありますが大変中身の濃いシンポジウムになったのではないかと考えています。こうした複数の学校間での共同研究や、山本先生が言ってくださったようなCASSERにおけるデータの蓄積は今後も続けていきます。

それに加えて、私どもは今年度から新しいことに取り組もうとしています。その一つとして、高等学校において生徒の個人研究型探究学習を指導する教員の研修プロジェクトを幅広く展開しています。来年度以降も続けることになっており、既に五十数名の方々がご登録くださり、毎月研修に参加していただいてディスカッションを展開しています。もう一つは、各学校のお困り事は本当に多種多様なので、オーダーメイドで各校のお悩みや困り事の解決を支援するプロジェクトで、非常に少ない額ですけれども費用を頂く形で進めています。

あるいは児童・生徒向けでは、探究学習の進め方に悩んでいる子どもたちから詳しく具体的な質問を頂いて、東京大学内の研究者で合う人をマッチングして紹介し、密に対話していただくというとても面白い取り組みも始めています。

つまり、非常にカオスな状況にある日本の探究学習を、悪口を言われっ放しではなく、何とか内実の伴った良いものにしていくために、私どもは小さなセンターですが、もがいているところです。今後もご関心を持っていただける方は、こういうプロジェクトに参加していただいたり、あるいはご寄付をお願いしたいと思います。予算もなく非常に困っているのです、何らかの形でご支援を頂けると大変うれしく思います。

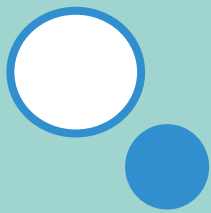
ということで、本当に長い時間のご参加、ありがとうございました。これからもこの両校、あるいはCASSERをどうか見守っていただきますようお願い

シンポジウム

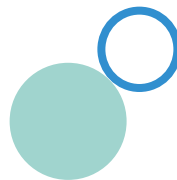
主体的・探究的な学びの多様性とは
一東大附属と自由の森学園の対話を通じた学びの在り方—
報告書

発行者：東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター
(編集担当：本田由紀、上野雄己、柴山笑凜)
発行者連絡先：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院教育学研究科赤門総合研究棟A212
c-kouka@p.u-tokyo.ac.jp

発行日：2026年3月31日



CASEER



東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター